

史跡斎宮跡

令和3年度現状変更緊急発掘調査報告

令和5（2023）年3月

明 和 町

序

新型コロナウイルス感染症の流行が今も続いています。この間、感染拡大防止のため、行動制限などさまざまな制約がなされてきました。しかし、斎宮跡ではこうした厳しい状況下でも発掘調査が進められ、新しい知見が見出されています。斎宮歴史博物館では、竹川地区で発掘調査が行われ、奈良時代の正方位区画内の建物の一部が見つかりました。次年度以降、さらに解明が進むことが期待されます。町においても、JA斎宮支店跡地の将来的な活用に向けて事前の発掘調査を行い、方格街区外であるものの掘立柱建物が複数棟みつかるなど貴重な成果が得られました。調査中には明和中学校の職場体験や、斎宮小学校の児童が見学に訪れるなど、斎宮跡の魅力を次世代に知ってもらうこともできました。

また、明和町を代表する祭りである「斎王まつり」が3年ぶりに開催され、斎宮跡で雅やかな平安絵巻を再現できました。加えて、一般社団法人明和観光商社では各種イベントの開催や実証実験が実施され、町と関係団体とが連携した活用が一層進められています。他にも、竹神社では地元住民の方々が企画した子ども向けのイベントが開催されるなど、「ウイズコロナ」の中で徐々に斎宮跡ににぎわいがもどりつつあります。こうした苦しい中での経験や人と人のつながりが「コロナ後」に斎宮跡が大きく飛躍する力となるよう、町においても引き続き斎宮跡の情報発信や、歴まち事業による環境整備等を推進してまいります。

さて、本書は史跡地内で個人住宅等の建設などに伴い発掘調査が必要であった11件の結果についてまとめたものです。調査に際しご理解とご協力いただきました地元地権者の皆さま、発掘調査から報告書作成に至るまでご指導、ご協力いただきました斎宮歴史博物館調査研究課の方々に厚くお礼申し上げます。

令和5（2023）年3月

三重県多気郡明和町
町長 世 古 口 哲哉

例 言

- 1 本書は、令和3（2021）年度に明和町が実施した史跡斎宮跡（三重県多気郡明和町斎宮・竹川地区）の現状変更緊急発掘調査の結果をまとめたものである。
- 2 本書に掲載した調査のうち、第201-1・4次調査は事業者の明和町が費用を全額負担したが、それ以外については文化庁及び三重県の補助金を受けて実施している。
- 3 調査は明和町が主体となり、斎宮歴史博物館および明和町斎宮跡・文化観光課が現地調査を担当した。
- 4 調査区名の表示方法（例：6AL13）については、斎宮歴史博物館2003『史跡斎宮跡 平成13年度発掘調査概報』による。
- 5 遺構の平面図は、過年度との整合をはかるため、「測地成果2000」以前の旧国土地理院第VI系に相当する座標系を用いて表示している。
- 6 遺構・遺物の時期区分については、斎宮歴史博物館2019『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』に掲り、その標記については「斎宮跡I期第1段階」と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「斎宮I-1期」と、遺構一覧・遺物観察表などでは「斎宮I-1」などとしている。その他の時期の土器については以下の文献を基準とした。
中世陶磁器類：中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
中世土器類：伊藤裕偉1996『伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る』『鍋と壺のデザイン』東海考古学フォーラム
- 7 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』に準拠し、遺構の種類から以下のように表記している。
SA：扉 SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SI：竪穴建物 SK：土坑 SZ：周溝墓・古墳
SP：柱穴・ビット（SA・SB・SIに伴う柱穴はP+番号と表記） SX：その他・不明遺構
- 8 図面・写真等の調査資料および出土遺物は、斎宮歴史博物館で一括保管している。
- 9 本書の執筆は、山中由紀子（斎宮歴史博物館）が前言・調査報告を、味噌井拓志（明和町斎宮跡・文化観光課）が付編の執筆を行い、編集は山中・味噌井が担当した。

目 次

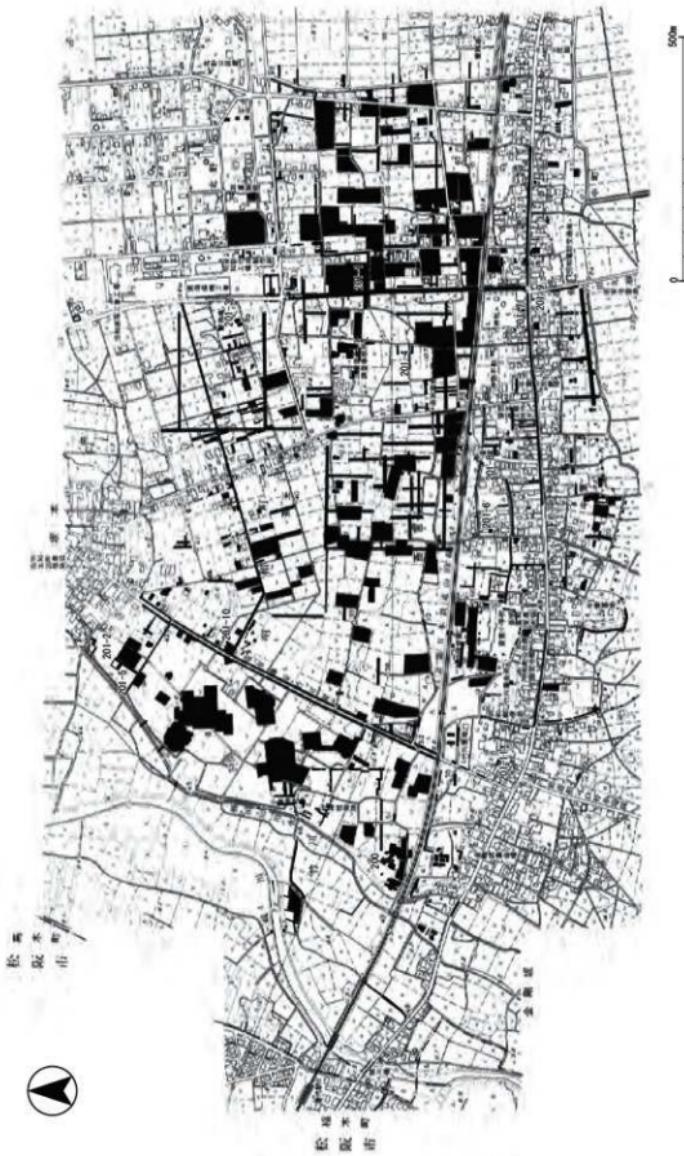
I	前言 (山中) 2	6	第201-6次調査 (山中) 18
II	調査報告		7	第201-7次調査 (山中) 20
1	第201-1次調査 (山中) 2	8	第201-8次調査 (山中) 22
2	第201-2次調査 (山中) 10	9	第201-9次調査 (山中) 22
3	第201-3次調査 (山中) 12	10	第201-10次調査 (山中) 23
4	第201-4次調査 (山中) 14	11	第201-11次調査 (山中) 27
5	第201-5次調査 (山中) 15	付編	史跡現状変更等許可申請 (味噌井) 33

表・挿図目次

第1表 史跡現状変更等許可申請の推移	2	第5表 第201次調査 出土遺物一覧表(3)	31
第2表 第201次調査 遺構一覧表	28	第6表 第201次調査 出土遺物一覧表(4)	32
第3表 第201次調査 出土遺物一覧表(1)	29	第7表 令和3年度現状変更等許可申請一覧	33
第4表 第201次調査 出土遺物一覧表(2)	30		
第1図 発掘調査地位置図	1	第19図 第201-4次調査 遺物実測図(2)	18
第2図 第201-1次調査区位置図	2	第20図 第201-6次調査区位置図	19
第3図 第201-1次調査とその周辺 遺構平面図	3	第21図 第201-6次調査 遺構平面図・土層図	19
第4図 第201-1次調査 遺構平面図(1)	4	第22図 第201-6次調査 遺物実測図	20
第5図 第201-1次調査 遺構平面図(2)	5	第23図 第201-7次調査区位置図	20
第6図 第201-1次調査 土層図(1)	6	第24図 第201-7次調査 遺構平面図・土層図	21
第7図 第201-1次調査 土層図(2)	7	第25図 第201-8次調査区位置図	22
第8図 第201-1次調査 遺物実測図(1)	8	第26図 第201-8次調査 遺構平面図・土層図	22
第9図 第201-1次調査 遺物実測図(2)	9	第27図 第201-9次調査区位置図	22
第10図 第201-1次調査 遺物実測図(3)	10	第28図 第201-9次 遺構平面図・土層図	23
第11図 第201-2・5次調査区位置図	10	第29図 第201-10次調査区位置図	23
第12図 第201-2・5次調査 遺構平面図・土層図・遺物実測図	11	第30図 第201-10次・第76-6次調査 遺構平面図・ 土層図・S25-099平面図・土層図	24
第13図 第201-3次調査区位置図	12	第31図 第201-10次・第76-6次調査 遺物実測図	25
第14図 第201-3次調査 遺構平面図・土層図・遺物実測図	13	第32図 第76-6次調査 遺物実測図	26
第15図 第201-4次調査区位置図	14	第33図 第201-11次調査区位置図	27
第16図 第201-4次調査 遺構平面図	16	第34図 第201-11次調査 遺構平面図・土層図	27
第17図 第201-4次調査 土層図	17		
第18図 第201-4次調査 遺物実測図(1)	15		

写真図版

写真図版1 第201-1次 3トレンチ全景(北から)	写真図版10 第201-5次 調査区全景(南東から)
写真図版2 第201-1次 4トレンチ北土層断面(北から)	写真図版11 第201-6次 調査区全景(北から)
写真図版3 第201-1次 7トレンチ全景(西から)	写真図版12 第201-7次 北区全景(西から)
写真図版4 第201-1次 15トレンチ全景(西から)	写真図版13 第201-7次 南区全景(北から)
写真図版5 第201-2次 東トレンチ検出状況(南から)	写真図版14 第201-8次 調査区全景(南西から)
写真図版6 第201-3次 A区全景(北から)	写真図版15 第201-9次 調査区全景(北から)
写真図版7 第201-3次 B区全景(南から)	写真図版16 第201-10次 調査区全景(北西から)
写真図版8 第201-4次 1トレンチ全景(西から)	写真図版17 第201-11次 調査区全景(北西から)
写真図版9 第201-4次 2トレンチ全景(北西から)	



第1図 発掘調査地位置図 (1:10,000)

I 前 言

令和3年度には40件の現状変更等許可申請が提出された。史跡指定後、年間約40~50件程度で推移しており、令和2年度は60件を超えたものの、令和3年度は例年並みの件数となった。現状変更の内訳をみると、個人住宅の新築や改築、これに伴う盛土など、史跡内住民の生活維持のための現状変更に加え、明和町による史跡の環境整備（排水路整備）などの歴史的風致維持向上計画（以下、「歴まち整備事業」）に伴う現状変更があり、事前の発掘調査や工事立会いで対応した。このうち、発掘調査が必要となった案件は11件で、調査面積の合計は約740.7m²である。

第201-2・3・5~11次調査は個人住宅・事務所の新築、あるいはそれに伴う盛土で、建物の基礎工事や浄化槽の埋設などに先立って実施した。一方、「歴まち整備事業」として、第201-1次調査は史跡東部、方格街区の「西加座北区画」において排水路改修に連関して、第201-4次調査は、史跡中央部、方格街区「柳原区画」と「御館区画」間の南北道路部分での地域住民の通行を可能にするための整備に先立つ発掘調査である。これらの調査はいずれも、遺構密度や遺構面の高さの確認など史跡保護にかかるデータの蓄積はもとより、斎宮跡の実態解明にとって重要な成果を得た。

年 度	現状変更申請数	発掘調査件数	調査面積 (m ²)	うち補助金調査件数	同調査面積 (m ²)
昭和54~平成30まで	1,781	468	70,208.1	287	26,713.1
令和元	27	7	2,007.3	5	349.3
2	65	13	717.7	6	418.7
3	40	11	740.7	6	151.6
	1,913	499	73,673.8	304	27,632.7

第1表 史跡現状変更等許可申請の推移

II 調査報告

1 第201-1次調査 (6AR9・S8・S9)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字西加座地内（道路、水路）

原因 「歴まち整備事業」にかかる排水路改修

調査期間 令和3年4月1日~令和3年9月24日

調査面積 425.9m²

調査概要 史跡東部において、排水路の改修にかかる現状変更に伴い、西加座地区的地下遺構の状況を確認するために実施した発掘調査である。「明和町歴史的風致維持向上計画」にかかる排水路改修に伴う発掘調査としては3カ年度目となる。町道が重複する地点では地域住民の通行を確保しながら、また、現在も排水路として機能していることから、既設排水路を撤去後すぐに調査に着手、調査完了直後に新しい排水路を施工する細切れの調査となった。調査順にトレーンチ番号を1、2、...と付与し、最終的には17トレーンチまでとなった。調査区の幅は約2.5~3m、延長約163mで、調査範囲は平安時代の方格街区内、西加座北区画内に取まる。

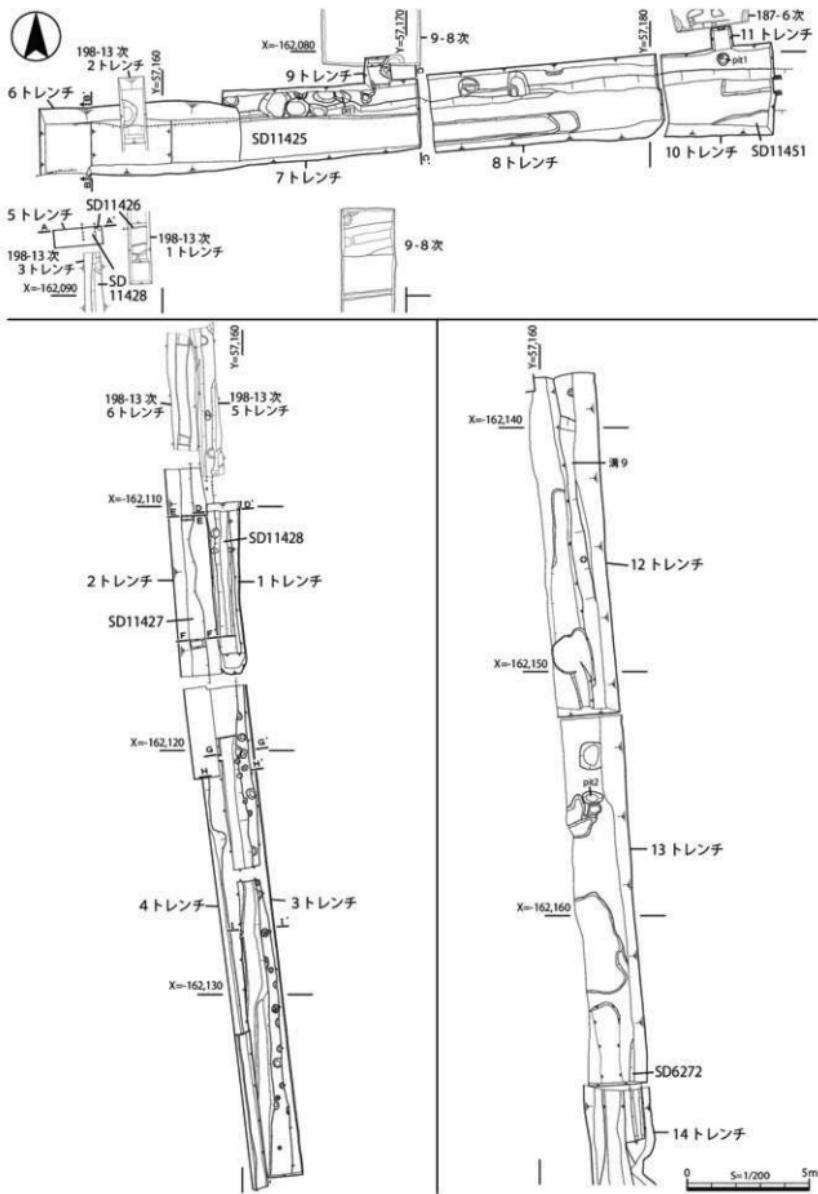
南西端の17トレーンチでは現況地表面から0.3m（標高9.6m）で遺物包含層となる暗褐色シルト層、地表面から0.7m（標高9.2m）で地山面に、南東端の14トレーンチでは現地表面から0.3m（標高9.5m）で遺物包含層である暗褐色シルト層、地表面から0.8m（標高9.0m）で地山面に、北西端の6トレーンチでは地表面から0.3m（標高9.4m）で地山面に、北東端の10トレーンチでは地表面から0.5m（標高9.4m）で地山面に至る。調査では地山面で遺構検出を試みた。既設排水路部分では地山面まで排水路埋設時の掘削がおよび、遺構は溝底部がわずかに確認できるのみであった。



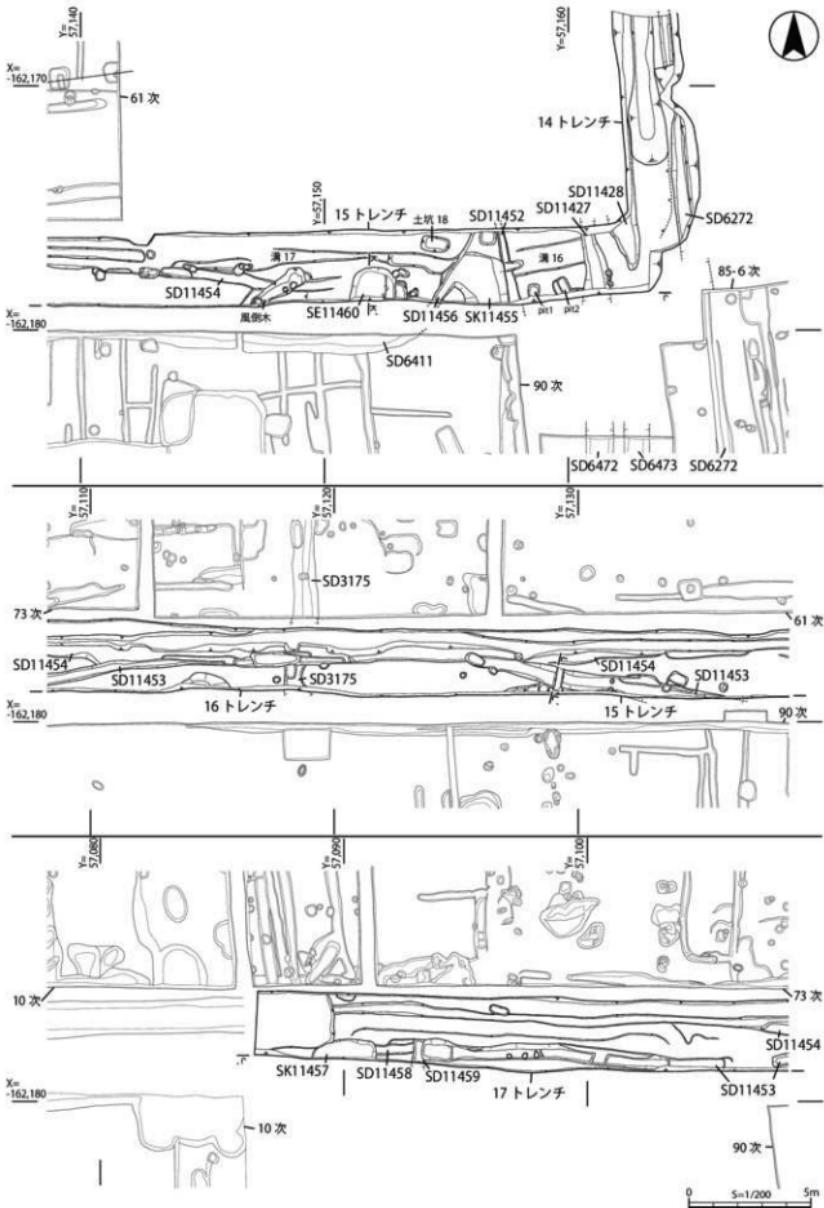
第2図 第201-1次調査区位置図 (1:2,000)



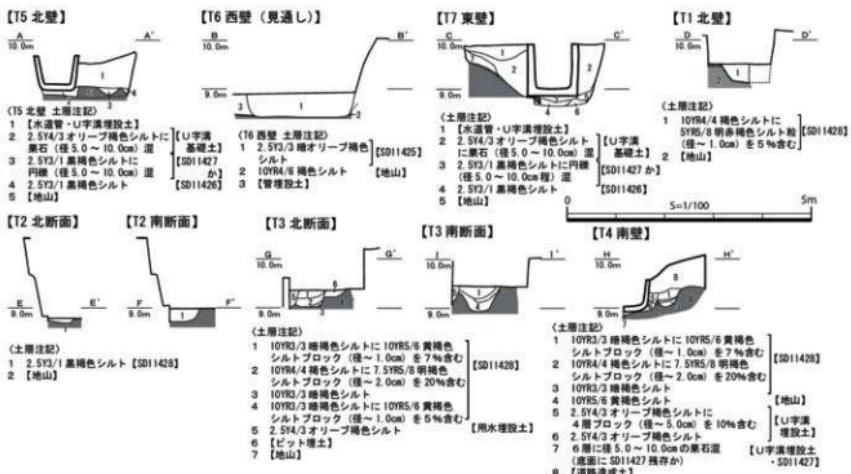
第3図 第201-1次調査とその周辺 透構平面図 (1:600)



第4図 第201-1次調査 遺構平面図(1) (1:200)



第5図 第201-1次調査 遺構平面図(2)(1:200)



第6図 第201-1次調査 土層図(1)(1:100)

が、その他の箇所ではピットや土坑、井戸、溝などが確認できた。

1～5・12～14トレンチの一部は西加座北区画中央を縦断するトレンチで、幅0.8～1.1mのSD6272・11427・11428・11452を確認。これらは西加座北区画を東西に区分する区画間道路側溝であると考えられる。6～11トレンチは西加座北区画の北辺、中央区画間道路から東方向に延びるトレンチで、すぐ西側の第51次調査等で確認している北辺道路南側溝(SD291)の延長とみられるSD11425を確認し、その北肩部にピット等が見られた。14トレンチの一部、15～17トレンチは西加座北区画の中央区画間道路から西へ延びる東西方向のトレンチである。15トレンチ東部で確認したSE11460は井戸と考えられ、一部が調査区外へ広がるが、東西1.9m・南北1.2m以上のやや方形を呈する平面形を持ち、安全確保のため完掘しなかったが遺構検出面から0.5m以上の深さを測る。掘削深度が浅いため井戸枠などは確認できなかったが、最終埋土層からは斎宮II～I期、奈良時代末～平安時代初頭の土師器・須恵器類が出土した。17トレンチ西端では後世の掘削が見られたが、調査区南壁土層断面において西加座北区画と下園東区画間の南北道路東側溝とみられる溝を確認した。

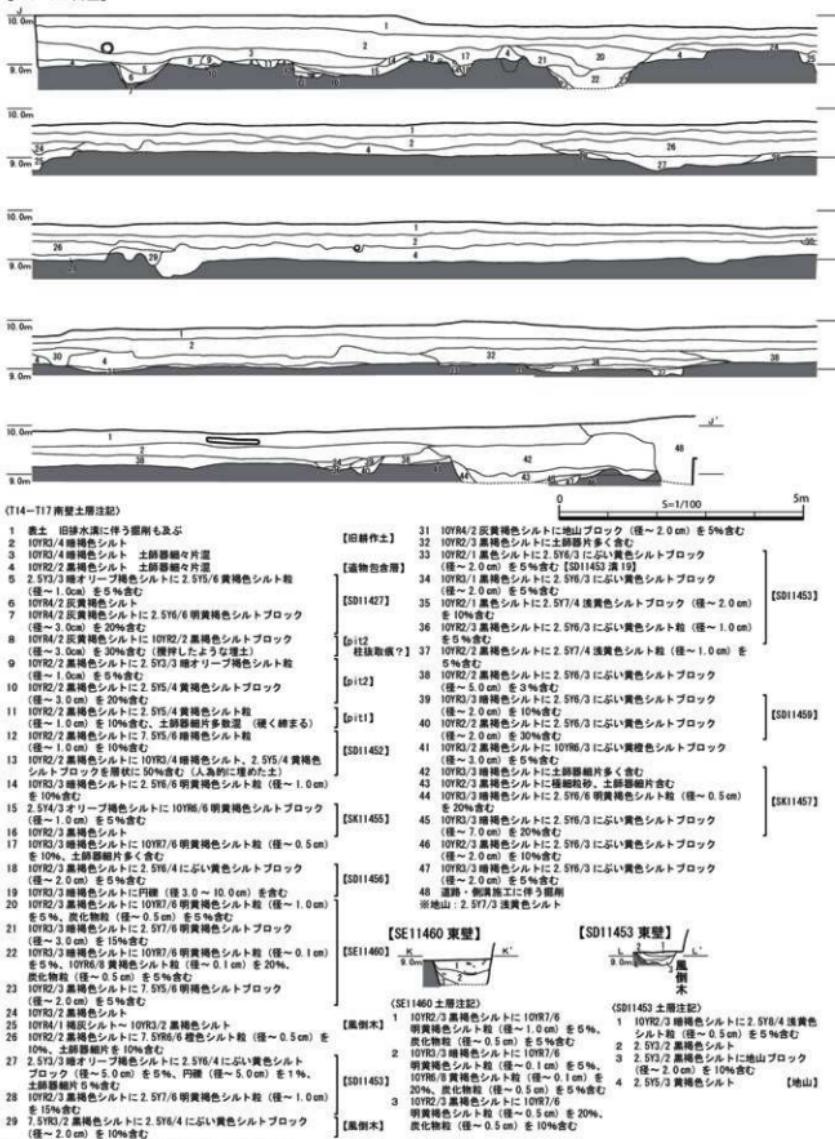
出土遺物には土師器や須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、ロクロ土師器、青磁、中世陶器、近世陶磁器、土製品、石製品、鉄製品などがある。紙数に限りがあるため詳細は遺物観察表(第3表)に掲り、特徴的なものだけ触れる。

SE11460出土遺物(14～39)は、上層のみの掘削ながら奈良時代末～平安時代初頭の遺物が多く出土した。土師器壺(33)は片側にだけ把手を持ち、内外面が煤により黒変している。底部外面には線刻が見られる。須恵器杯蓋(34)は内面に「安」と読める刻書が施されている。下園東区画の第178-2次調査出土の皿に類例があり、伊賀産のものとされていることから本例も伊賀産と見てよいだろう。須恵器杯A(35)は底部が丸みを帯びる。底部内面は平滑であり、転用観の可能性はあるが、墨痕などは見られない。

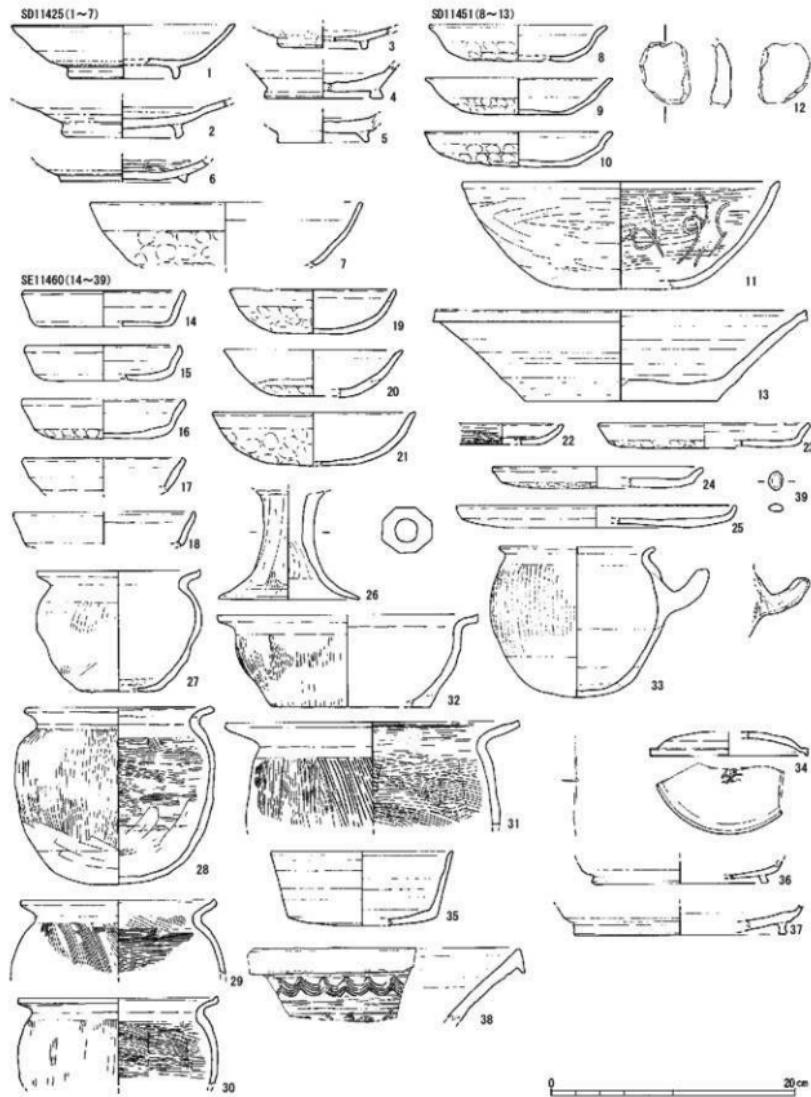
SD11428出土の土師器高杯A(49)は脚部のみの出土である。9面の面取りを施し、脚端部との間に段を持つ。脚部は分厚く内部に直径1.0cmの孔を持ち、脚端部に向けて弯曲しながら開く。長岡京左京南一条三坊三町SD8903下層に類例があり、8世紀末の所産と考えられる。

その他、須恵器香炉(70)は平城京東三坊大路SD650B出土遺物に類例がある。平城京例は脚部は長く透かしを持つ点が本例とは異なるが、口縁部から体部の形状が類似することから香炉とした。須恵器杯A(71)は内面に墨書き

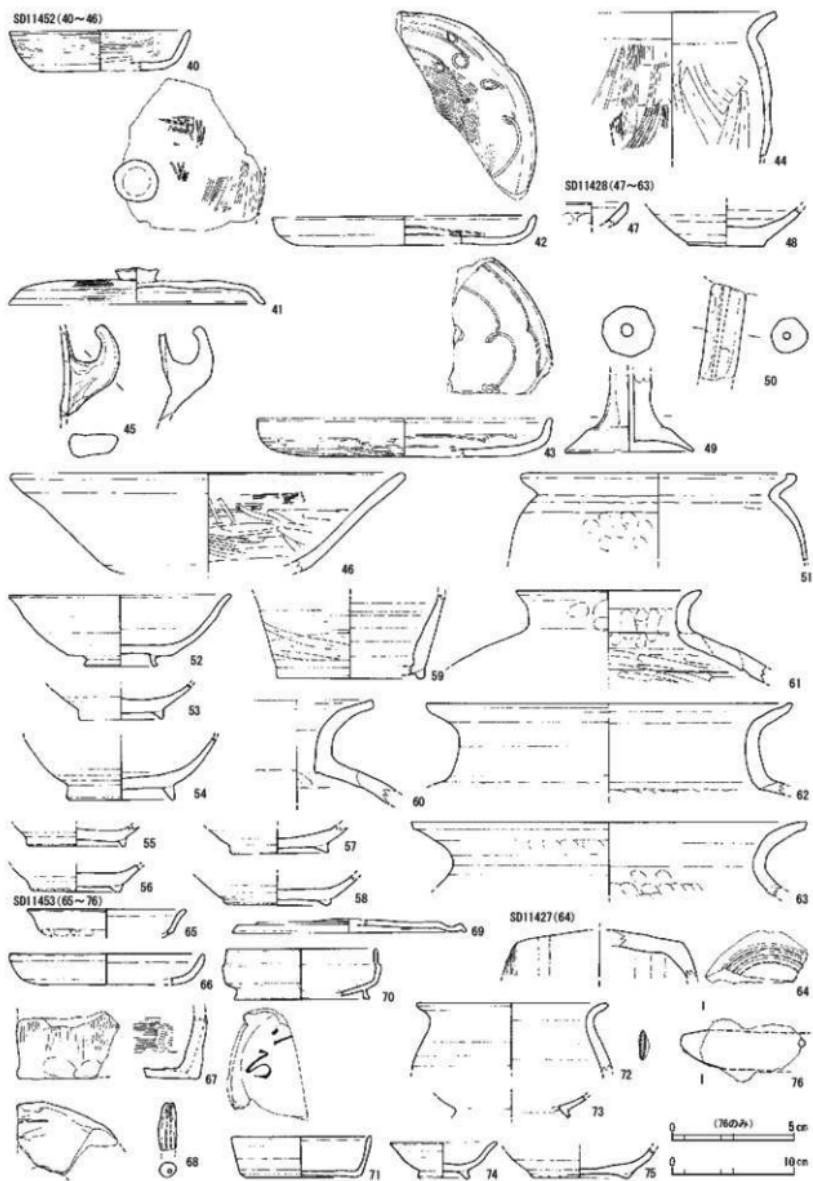
[T14-T17 南壁]



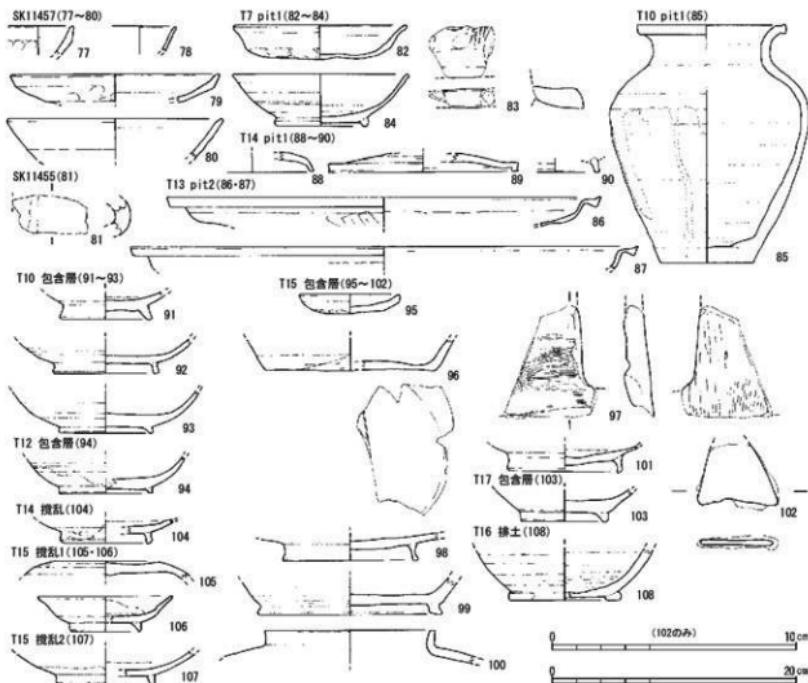
第7圖 第201-1次調查 土壤圖(2) (1:100)



第8図 第201-1次調査 遺物実測図(1) (1:4)



第9図 第201-1次調査 遺物実測図(2) (1:4, 76のみ1:2)



第10図 第201-1次調査 遺物実測図(3) (1:4, 102のみ1:2)

持つ。確認できる部分を図化したが、空白箇所にも墨書がある可能性はある。(67)は土師器不明品としたが、図の左、体部から底部にかけて面を持っている。また、底部においても円形となるような孔があると思われる。瓶に類するものであればこの図の向きでよいが、移動式カマドであれば図は天地逆となる。細片のためどちらとも判断できない。陶器壺(85)はT10pit1から正位で出土したものである。後世の掘削等の影響のためか口縁部の残存は2/12ほどであるが、頭部から底部にかけてほぼ完存する。渥美産で12世紀代の所産と考えられ、骨蔵器とも考えられるが蓋など閉塞物は見られず、内容物も無かった。

2 第201-2次調査 (6AK4)

調査場所 多気郡明和町大字竹川字古里582-1, 582-2地先

(赤道)

原因 宅地造成等

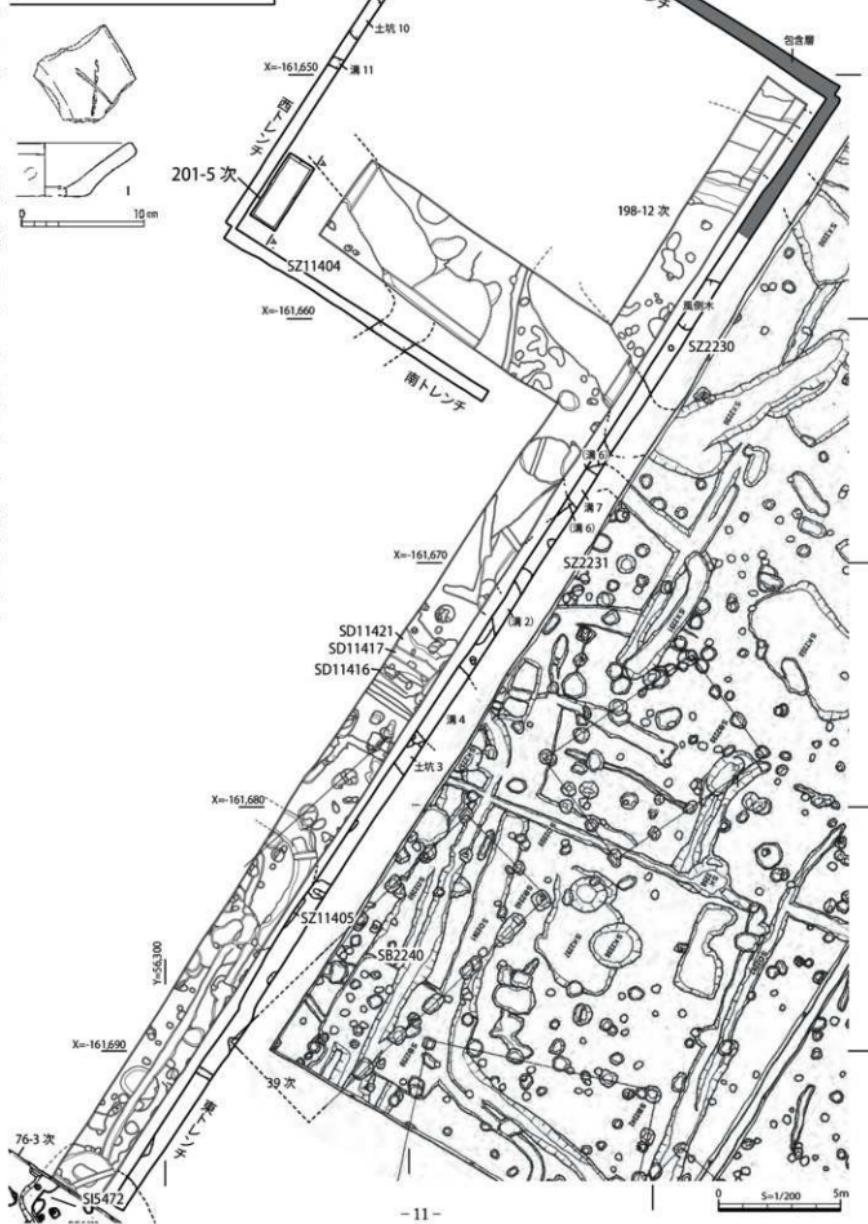
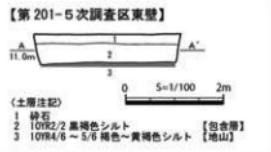
調査期間 令和3年4月9日

調査面積 62m²

調査概要 宅地の造成に伴い、コンクリートブロック塀施工範囲について事前に実施した発掘調査で、調査地は史跡北西部の畠地である。南部道路からの進入路の東側と、宅地造成



第11図 第201-2・5次調査区位置図 (1:2,000)



部の四周に延長約103m、幅約0.6mの調査を設定した。東に昭和56年度第39次調査地、西に令和2年度第198-12次調査地、南に昭和63年度第76-3次調査地が接する。

コンクリートブロック塀施工により現況地表面から0.3mの深さまで掘削するが、調査区大半で現況地表面から約0.3mで遺構検出面に達することから、その範囲は遺構検出に止めた。また、東トレンチ北部・北トレンチ東半部については、施工深度は遺物包含層内に収まつたため、遺構検出は行っていない。

遺構は掘削していないため詳細な時期、遺構の種類等は不明であるが、隣接する調査の成果から、弥生時代後期の方形周溝墓4基分の周溝を4条(SZ2230・SZ11405・SZ2231・SZ11404)、奈良時代の掘立柱建物SB2240の柱穴1、奈良時代の堅穴建物1棟(S15472)、時期不明の堅穴建物1棟(S111461)の他、溝5条や土坑2基などを確認した。

SZ2230は第39次調査で確認されており、今回の調査ではその西周溝の一部を確認した。北周溝が延びる部分は包含層で止めた範囲に当たるため確認していない。SZ2231は、第39次調査・第198-12次調査で確認しており、今回北西周溝の一部、幅は広いため別遺構が重複している可能性があるが南北周溝の一部を確認した。SZ11404は、第198-12次調査で東周溝を確認しており、今回の調査では南周溝を確認した。SZ11405は第198-12次調査で確認しており、今回は南東周溝の一部を検出した。

掘立柱建物SB2240は、第39次調査で大半が確認されているが、その桁行方向の柱穴に当たると考えられるピットを検出した。S15472は第76-3次・第198-12次調査で確認した遺構の一部とみられる。S111461は北トレンチと西トレンチに跨って検出されたが、残存する深さが浅いためか堅穴建物の西辺は確認できない。しかし、硬化部を確認しており、この範囲よりも西側まで堅穴建物が広がり、建物規模は東西4.5m以上となると考えられる。

遺構削除を行っていないため、出土遺物は非常に少ないが、遺構埋土から弥生土器・土師器、包含層から須恵器などが出土した。遺構出土に、SZ2230から外面に縦方向のミガキを施した弥生土器蓋と思われる体部片1点、SZ2231からは横方向ハケと凹線が外面にみられる円筒埴輪体部片と考えられる破片1点がある。北トレンチの包含層から土師器盤と考えられる破片(1)があり、内面に「×」の線刻がある。その他、東トレンチ北部包含層から土師器盤、須恵器體部片(内面に同心円文タタキ)が出土している。

3 第201-3次調査(6AR6・R7)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字座殿2895番地2

原因 宅地造成

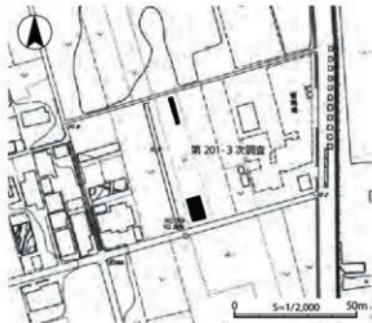
調査期間 令和3年5月17日～6月1日

調査面積 75m²

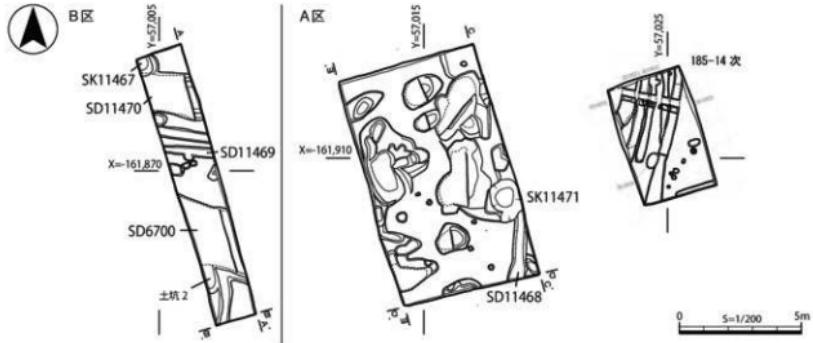
調査概要 宅地の造成に伴って事前に実施した発掘調査で、調査地は史跡北東部の畠地である。申請地の南部にA区として南北9.7m、東西5.7mの調査区を、北部にB区として南北11.5m、東西1.8mの調査区を設定した。

地山面は、A区においては現況の地表面から南端で0.5～0.6m、北端で0.9～0.95m下で確認できる。B区では現況の地表面から南端で0.55m、北端では0.35m下で確認した。

A区南東部では地山面まで現代の掘削・盛土が及び、B区北半部においても表土・盛土を取り除いてすぐに地山面に達するため、本来の遺構面が確認できない。それ以外の部分では、A区北半部では地表面から0.6m、B区南半部では0.35mで遺物包含層に達し、本来はその層上で遺構検出を行うべきであるが、遺構埋土と遺物包含層土が類似するため、遺構検出は地山面上で行ったところ、A区において平成27年度第185-14次調査でも確認していたN15°Eの溝と一連のものと考えられるSD11468を確認した。出土遺物はないが、第185-14次調査で確認した溝の年代は斎宮



第13図 第201-3次調査区位置図(1:2,000)



【B区東壁】



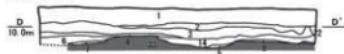
【B区南壁】



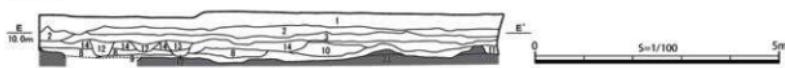
【A区東壁】



【A区南壁】



【A区西壁】



(土層記述)

2. 黒土、近年の埋め土。中粒砂わずかに混

3. 10YR4/2 黄褐色シルト

4. 2.5Y4/4 黄褐色シルトに 2.5Y5/6 黄褐色シルトブロック

(径～2.0cm) を 3 %含む

5. 10YR3/4 黄褐色シルトに 2.5Y6/6 明黄褐色シルトブロック

(径～3.0cm) を 30 %含む

6. 10YR4/4 黄褐色シルトに円錐 (径～5.0cm) を 10 %

細砂が多く含む

7. 10YR3/4 黄褐色シルトに 2.5Y7/6 明黄褐色シルト粒 (径～1.0cm) を 5 %含む

8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (植物現状の跡が見られる)

9. 10YR5/4 黄褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック

(径～3.0cm) を 10 %含む

10. 10YR4/4 黄褐色シルト

11. 10YR4/4 黄褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック

(径～1.0cm) を 5 %含む

12. 2.5Y7/5 明黄褐色シルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック

(径～5.0cm) を 5 %含む

13. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト

14. 10YR2/3 黑褐色シルト

15. 10YR2/3 黑褐色シルトに 2.5Y5/6 明黄褐色シルトブロック

(径～2.0cm) を 5 %含む ポソボソしている

16. 2.5Y3/3 黑褐色シルト

17. 10YR2/3 黑褐色シルト

18. 10YR2/3 黑褐色シルト

19. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトに 2.5Y5/6 明黄褐色シルトを層状に

50 %含む (人為的な)。SD6700 の南側に土壌柱に盛った土か)

20. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック

(径～1.0cm) を 10 %含む

21. 2.5Y4/3 黄褐色シルト

22. 10YR4/3 黄褐色シルト

23. 2.5Y5/5 黄褐色シルトに 10YR7/8 黄褐色シルトブロック

(径～2.0cm) を 5 %含む

[表土・造成土] 2. 5Y3/3 深オリーブ褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック (径～1.0cm) を 1 %含む

25. 10YR5/6 黄褐色シルトに 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトブロック (径～1.0cm) を 10 %含む

26. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトに 10YR5/4 明黄褐色シルトブロック (径～1.0cm) を 10 %含む

27. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトに 2.5Y6/6 明黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) を 5 %, 10YR2/4 暗褐色シルトブロック (径～1.0cm) を 5 %含む

28. 10YR3/4 暗褐色シルト

29. 10YR4/4 暗褐色シルト

30. 10YR4/4 暗褐色シルトに円錐 (径 1.0 ~ 5.0cm) を 20 %含む

31. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト

32. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック (径～2.0cm) を 5 %含む

33. 2.5Y6/6 7/8 明黄褐色シルト

[SD6700]

[SD22499, SD11470]

[地山]

[土壌試験値]

[SD6700]

[SD6700]

[SD6700]

[SD6700]

[SD6700]

[SD6700]

[SD6700]



第14図 第201-3次調査 遺構平面図(1:200)・土層図(1:100)・遺物実測図(1:100)

III-1期古相、10世紀後半の所産とされ、SD11468も同様の時期と考えられる。それ以外の遺構はなく、調査区の大半で不整形の窪みが見られる程度である。この窪みが確認できる範囲の地山面と、SD11468を確認した南東部地山面との比高は0.4mあり、不整形の窪みの埋土及び地山面上堆積土は腐植土を含むことから、A区中央から北は低湿地状を呈していたと推定できる。

それに対しB区では東西方向の溝4条を確認した。そのうち南端の溝はいわゆる「鎌倉大溝」SD6700と考えられる。幅2.4m、深さは地山面から0.4m掘り下げたが底面は確認できていない。断面形状は南岸に段を持つがほぼ箱掘り状を呈する。北端のSD11470は幅1.7m・地山面からの深さ0.35m、断面台形状を呈する溝である。SD6700とSD11470の間には幅0.4~0.45m・深さ5cm程度、断面台形状の小溝2条が並走する。その他土坑2か所を確認したが、これらの溝が埋没した後に掘削されていることから、近世以降の所産と考えられる。

遺物は須恵器甕、灰釉陶器碗、陶器碗や土師器片などがあるが、総じて出土量は少ない。A区から、SK11471出土遺物として陶器碗（1）がある。瀬美産で、12世紀後半代の所産と考えられる。そのほか圓化はしていないが包含層出土として高台が欠損しているが、はがれた痕跡があることから土師器皿Bもしくは杯Bと考えられる底部片が出土しており、土坑6出土の土師器片が同一個体のもの可能性がある。A区包含層からはそのほか須恵器甕体部片が1点ある。A区土層断面からの出土として、東壁2層からは近現代陶器片、土師器片、3層からは中世以降と考えられる土師器片、4層からは中世以降と考えられる土師器片、最下層の第17層から灰釉陶器碗底部片（三日月高台）（3）が出土している。これはK90窯式3型式のもので、9世紀末頃の所産である。

B区からはSD11469出土遺物として灰釉陶器碗（2）があり、10世紀前半代の所産と考えられる。その他包含層からは、須恵器杯（4）、特に中央付近の包含層からは、鉄滓1点、土師器片などがある。北部包含層からは土師器片、南部包含層からは陶器碗（瀬美産）底部片、土師器片、黒色土器片、近世陶器片などが出土している。

4 第201-4次調査（6AQ10）

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字御館

2946-4、2946-5、2947-1、2947-3、2948-3

原因 「歴まち整備事業」にかかる発掘調査

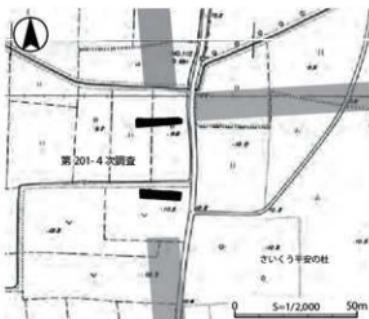
調査期間 令和3年6月22日～7月28日

調査面積 90m²

調査概要 明和町による「歴まち整備事業」に伴い、地下遺構の確認を目的として実施した発掘調査である。調査地は史跡東部の畠地等で、方格街区の柳原区画の北西部にあたり、柳原区画西の南北道路及び北の東西道路と西の南北道路の交差点の確認が予想された。調査では、申請地の北部に1トレンチとして東西18.5m・南北2.0~2.8mの調査区を、南部に2トレンチとして東西16.5m・南北3.0mの調査区を設定した。

1トレンチは谷状地形が入り込み、基本層序は上から表土、遺物包含層、明黄褐色シルト土層、暗褐色シルト土層となるが、調査区壁面土層断面観察から、明黄褐色シルト土層上面を遺構検出面として認識した。遺構検出面までの深度は、現況の地表面から東端で0.55m、西端で0.5mである。2トレンチは安定した地山面が形成されており、地山面までの深度は現況の地表面から東端で0.25m、西端で0.4mである。

1トレンチでは東西道路と南北道路の交差点の存在が期待されたが、平面検出においても調査区壁面土層観察においても東西道路の南側溝は確認できなかった。南北道路については東側溝が位置すると考えられる地点の調査区南壁面土層において黒褐色土の浅い落ち込みを確認し、東側溝SD11464とした。西側溝については近世の掘削が見られる



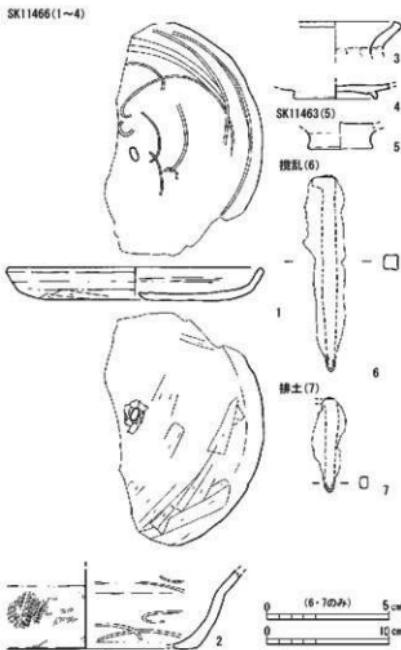
第15図 第201-4次調査区位置図 (1:2,000)

が、調査区南壁及び西壁において黒褐色土層が確認でき、底部近くから斎宮II-1期新相、9世紀初め頃の土師器皿(1)が出土するもの。2トレンチのSD9999(西侧溝)底部との比高が0.7mとなり、後世の掘削による混入の可能性が高い。

2トレンチでは南北道路の西侧溝が確認できた。SD9999は第158次調査でも確認しており、幅0.7~0.8m、地山面からの深さ約0.25mで、埋土から8世紀末~9世紀初頭の遺物がまとまって出土したことから、区画道路施工間もない時期に埋没したものと考えられる。東側溝は相当する部分にピットが確認できるものの溝とはならず、西側溝に比して浅く削平されているものと推定する。その他、SD9999に東接するSK11462は、東側にSD3558が重複し全容は不明であるが南北2.2m以上、東西1.4m以上の不整形円形を呈し、土層の確認からSD9999に後出する。土坑底部からは須恵器蓋(25)が逆位で出土した。その他、SD9917・SK9961・SD3558、SK11465・土坑5は出土遺物は少ないが、土層断面等から近世の所産と考えられる。

遺物は、SD9999から土師器杯(8)・杯蓋(9)・甕(12・13)・須恵器杯・鉢・転用硯・壺等がまとまって、SK11462から墨書のある須恵器蓋(25)が出土するなど、比較的の出土量が多い。須恵器蓋(25)は類例がなく、頂部に糸切り痕が明瞭に残ることから杯の可能性も検討したが、端部に返りを持つことなどからここでは蓋とした。

1トレンチからは特に西部に集中して遺物が出土した。SK11466出土遺物として土師器皿(1)・鉢(2)・甕(3)・灰釉陶器椀(4)が出土している。(1)は中央部に穿孔があり、焼成後に外面から穿孔されている。斎宮II-1期、8世紀末~9世紀初頭の所産である。土師器皿(1)はSK11466下層の西壁19層から、K90窯式3型式、9世紀後半代の灰釉陶器椀(4)はSK11466上層からの出土であり、層位的にも矛盾はない。



第18図 第201-4次調査 遺物実測図(1)(1:4, 6-7は1:2)

5 第201-5次調査(6AK4)

調査場所 多気郡明和町大字竹川字古里582-1

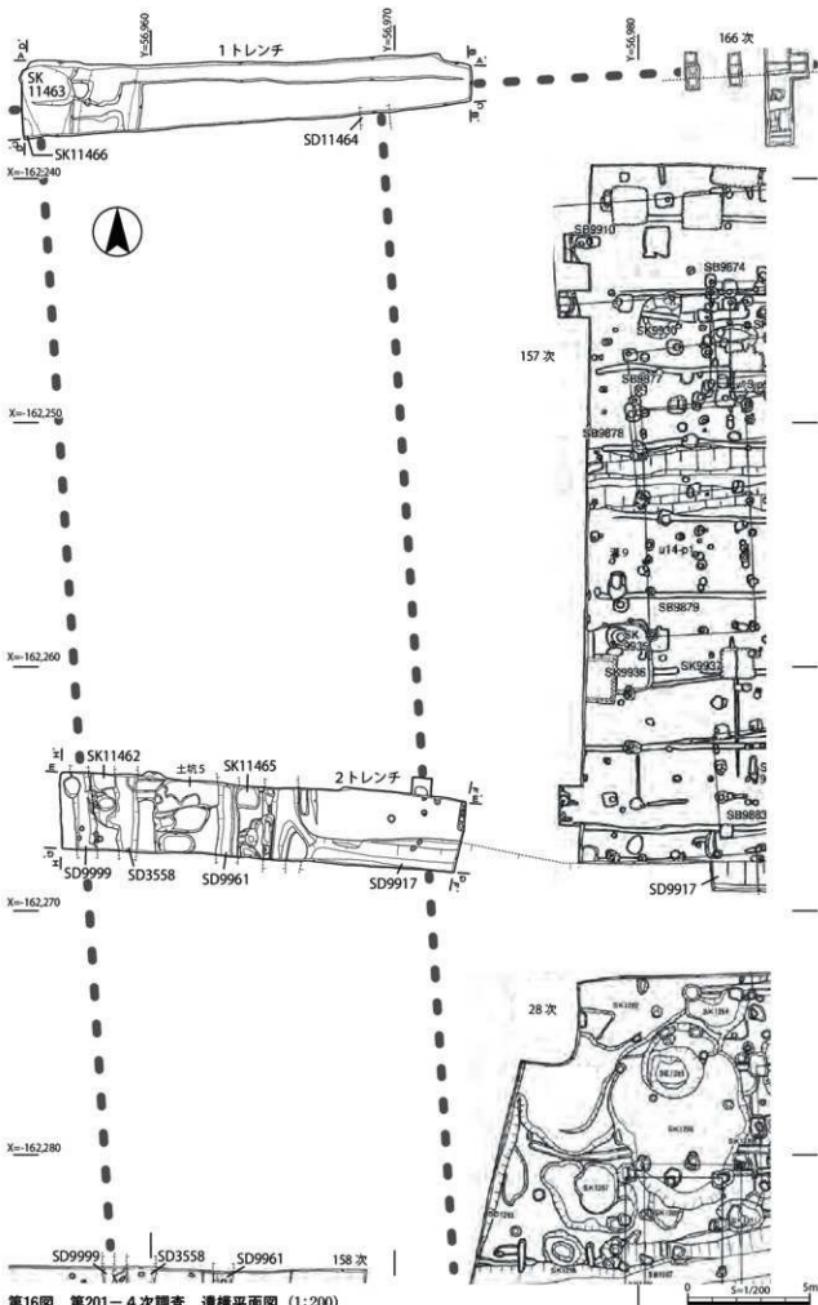
原因 住宅建築

調査期間 令和3年8月27日

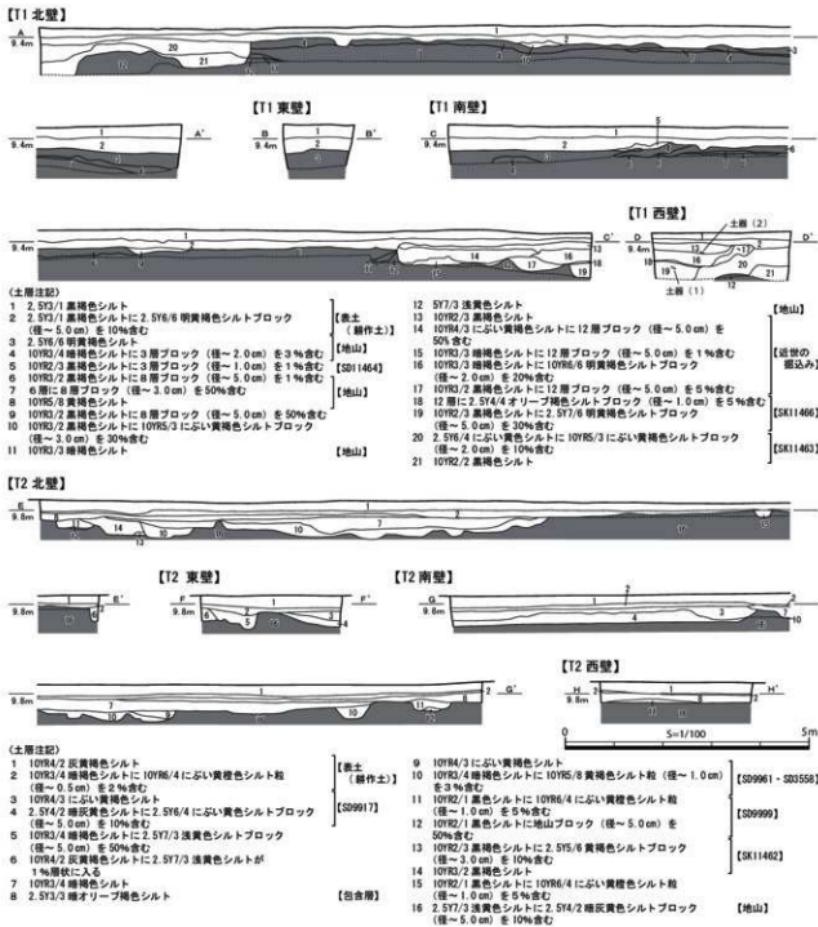
調査面積 3.6m²

調査概要 住宅建築に伴い浄化槽設置範囲について事前に実施した発掘調査で、調査地は史跡北西部の畠地である。西に令和2年度第198-12次調査地が、東に令和3年度第201-2次調査地が接する。(第11・12図参照)

現地には住宅建築に伴い約0.2mの碎石が敷かれ、その下層に厚さ約0.4mの遺物包含層があり、現地表面から約0.6mで遺構検出面に達する。調査区内では遺構は確認できていない。

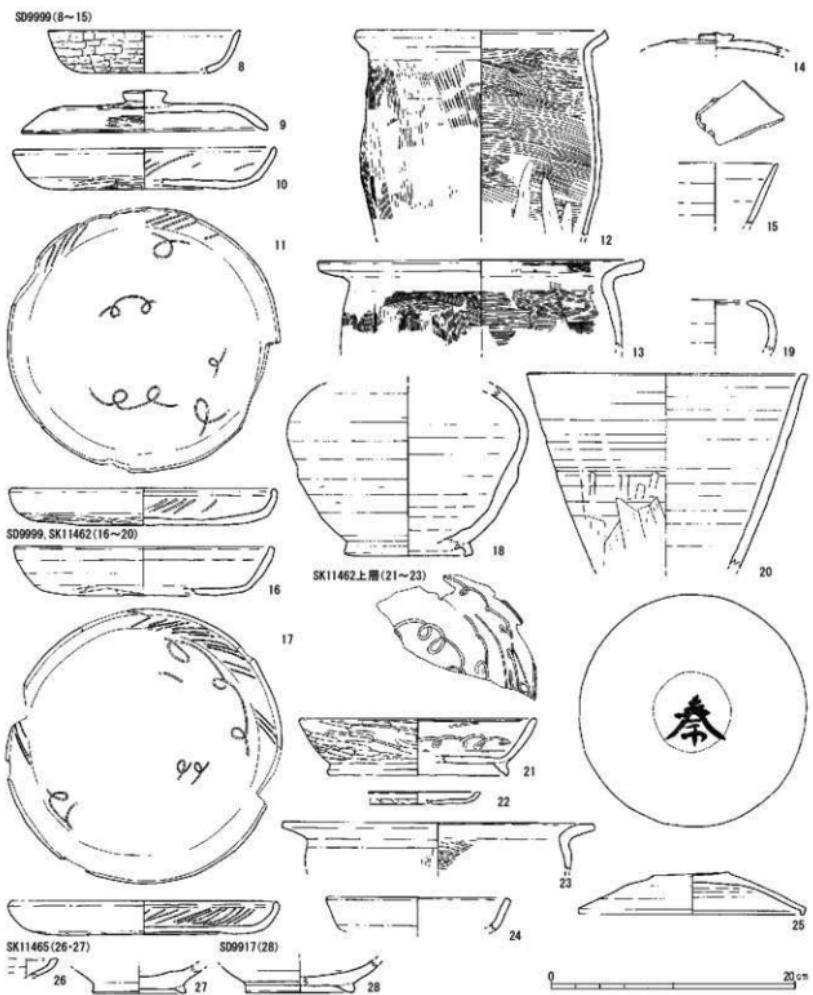


第16図 第201-4次調査 遺構平面図 (1:200)



第17圖 第201—4次調查 土層圖 (1:100)

第198-12次調査ではSZ111404の北西周溝が検出され、今回その延長を想定したものの確認できなかった。北西周溝の底面は当時の地表面から約0.75m下、標高10.38mであるが、今回の調査では標高10.7mで地山面を確認している。また、第201-2次では同じく標高10.7m程度で地山面を確認しており、今回の調査地及び第201-2次調査地にはSZ111404の北西周溝もしくは北東周溝は延びないことから、SZ111404は北東コーナー部が陸橋状に剛切れになると推定される。遺物は包含層から土師器片が出土したのみである。



第19図 第201-4次調査 遺物実測図(2)(1:4)

6 第201-6次調査(6AM12)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字内山3037番1、3037番14

原 因 住宅建築

調査期間 令和3年9月1日~21日、令和4年1月12日

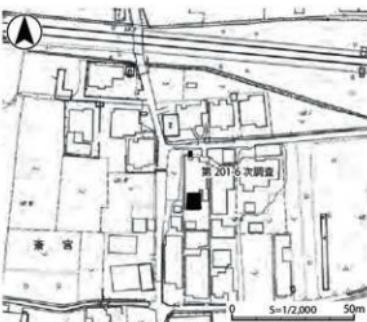
調査面積 43.7m²

調査概要 住宅建築に伴い、事前に実施した発掘調査である。申請地は地下遺構の様相が判明していないことからそ

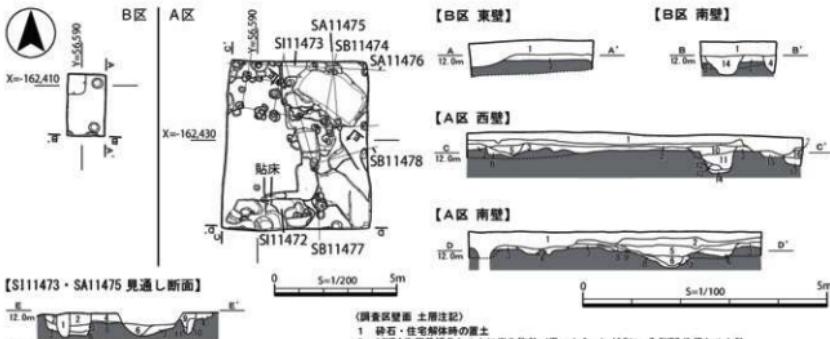
の確認を目的とし、また浄化槽埋設により破壊が免れない範囲を対象として調査を行った。調査区は2カ所に分かれ、A区が39.7m²、B区が4m²である。調査地は史跡中央部の宅地、平安時代の方格街区の「内山西区画」北西隅にあたる。

基本層序は、A区は現地表面から0.2m（標高12.2m）で遺物包含層に達し、更に0.1m（標高12.1m）で遺構検出面とした地山面に達する。B区は現地表面から0.27m（標高12.05m）で遺物包含層に達し、更に0.1m（標高11.95m）で遺構検出面とした地山面に達する。遺構は、A区では遺構面に大きく擾乱が及んでいたが、堅穴建物2棟、掘立柱建物3棟、柱列2条、その他ピットを確認した。B区ではピット4基を確認した。

SI11473は、東西約2.5m・南北2.7m以上、地山面からの深さ約0.15mの平面形状が隅丸方形となる堅穴建物である。主柱穴やカマドなどは確認できていない。埋土から奈良時代の須恵器杯A（5）や土師器杯類破片・壺把手部（3）などが出土している。SI11472は後世の土坑が重複するため形状等は不明であるが、北辺で確認した壁周溝状の小溝や床面に褐色ブロック・黒褐色ブロック混り土の広がりを確認し、これを貼床と判断した。北辺壁周溝から奈良時代の須恵器杯蓋口縁部（7）が出土している。SA11475は南北方向に並ぶ柱穴2基を確認したのみで、柱穴が一辺0.6m以上の方形を志向し、柱痕跡は直径0.3mを測る。調査区外北東隅で確認したことから、調査区外に広がる掘立柱建物の可能性がある。柱痕跡から奈良時代の土師器皿口縁部（8）が出土している。SA11476はSA11475に重複し、柱

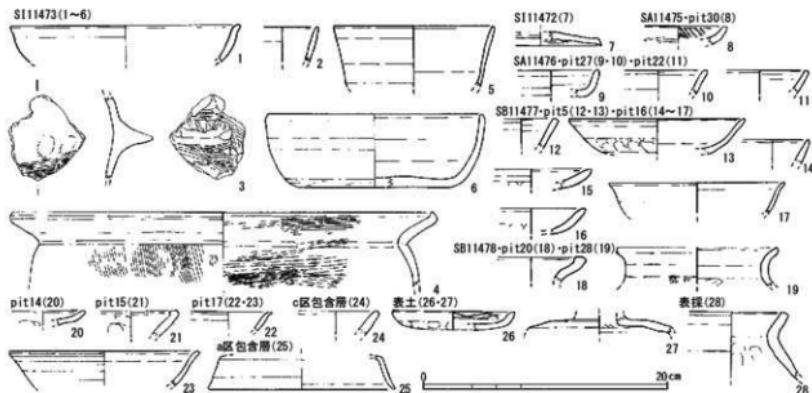


第20図 第201-6次調査区位置図 (1:2,000)



- (SI11473・SA11475 見通し断面)
- 0 5m/1/200 5m
- (調査壁壁面 土壌注記)
- 1 砂石・住宅解体時の廻土
 - 2 10YR4/2 黒褐色シルトに 7.5YR7/6 褐色シルト粒（径 1.0cm）を 10% 含む
 - 3 10YR4/2 黒褐色シルトに 10YR7/6 明黄褐色シルト粒（径 1.0cm）を 5% 含む
 - 4 10YR4/3 黒褐色シルトに 7.5YR6/6 明黄色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 10% 含む
 - 5 10YR4/4 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 6 10YR4/1 黒褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 7 10YR2/1 黒褐色シルトに 10YR7/6 明黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 8 10YR2/3 黑褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 9 10YR2/2 黑褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 10 10YR2/3 黑褐色シルトに 7.5YR5/6 明黄色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 11 10YR2/2 黑褐色シルトに 10YR6/6 明黄色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 12 7.5YR6/6 明黄色シルトに 10YR2/1 黑褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 10% 含む
 - 13 10YR2/3 黑褐色シルトに 7.5YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 14 10YR2/3 黑褐色シルトに 7.5YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 10% 含む
 - 15 10YR3/4 黑褐色シルトに 10YR6/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 16 10YR4/2 黑褐色シルトに 10YR3/3 黑褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 17 10YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 5% 含む
 - 18 10YR5/6 黄褐色シルト粒（径 1.0cm ~ 2.0cm）を 3% 含む
- [a区 pit30] [b区 pit30] [c区 pit28]

第21図 第201-6次調査 遺構平面図 (1:200)・土壌図 (1:100)



第22図 第201-6次調査 遺物実測図 (1:4)

穴は調査区内では3基確認するのみであるが、調査区外へ広がる掘立柱建物の可能性がある。柱掘方は一辺約0.8m程度の方形を呈し、柱痕跡は直径0.25m程度である。柱痕跡から平安時代前期の土師器杯片が出土している。SB11477は調査区南東部で確認したが、大半が調査区外へと広がる。東西2間以上・南北3間以上で、柱穴は隅丸方形を呈するが一辺約0.3mと小規模である。出土遺物は平安時代後期の土師器皿（13）などが出土している。S11472上では平面形が不整円形で、断面形状は捕鉢状を呈する土坑状の遺構を3基検出した。平安時代後～末期の土師器片が多数出土しているが、一部は貼床を誤認して掘削していると考えられ、柱穴となるものが含まれる可能性がある。その他ビットの中には柱抜取痕が確認されるものもあり、本来は建物となる柱は多くあるものと考えられる。

出土遺物には、多数の土師器片の他、綠釉陶器や灰釉陶器椀などがあるが、いずれも奈良時代～平安時代の範疇に収まるものである。S111473出土遺物として土師器杯（1）、壺把手部（3）、須恵器杯（2・5・6）がある。須恵器杯（6）は体部から底部にかけて丸みを帯びながらも底部は平坦となる形状を呈し、平城II期の杯Eに類似する。

7 第201—7 次調查 (6AQ12・Q13)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字牛葉2992、2993

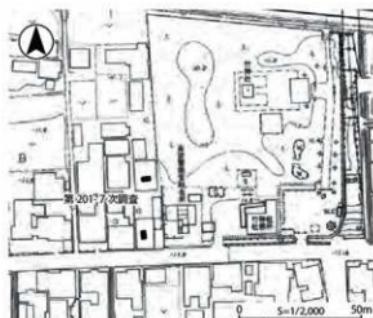
原 因 住宅建築

調査期間 令和3年10月1日

調查面積 8.4m²

調査概要 住宅建築に伴い事前に実施した発掘調査で、調査地は史跡南部の宅地で、浄化槽埋設部2か所について発掘調査を実施した。北区は約4.4m²、南区は約4m²、計約8.4m²の調査となった。

基本層として、北区では碎石が現地表面から0.4m堆積した下に、調査区北半部では近世瓦を伴う擾乱層が0.5m堆積し、遺構検出面の地山層となる。擾乱層は調査区南部では遺地表面から0.35m堆積した下に、遺物包含層である暗褐色色



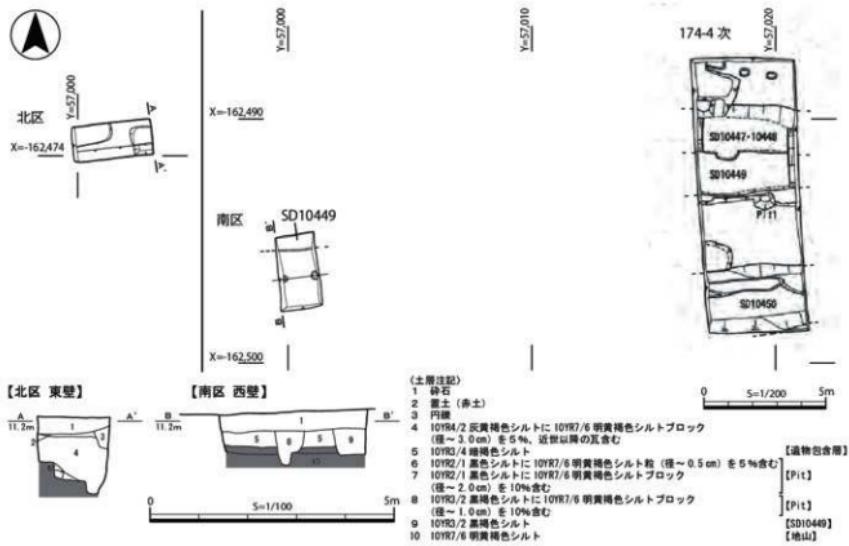
第23図 第201-7次調査区位置図 (1:2,000)

北区では、調査区南辺と北西部分に後世の搅乱が及んでいるが、北東部に東西0.8m以上、南北0.75m以上の方形を呈する土坑があり、調査区東壁土層観察によりその埋土は上から、明黄褐色シルト粒が混じる黒色シルト層と、明黄褐色シルトブロックの混入比率が高い黒色シルト土層がほぼ水平に堆積する。遺構検出面からの深さは0.37mで、底面に柱当たり痕跡は確認できなかったが、遺構の形状や埋土の状況から柱穴の可能性が高いと考える。調査範囲の関係からこれに対応する他の柱穴は確認できなかった。

南区では調査区北端で東西方向に走るSD10449と、その南側約1mの位置にピット2基を確認した。SD10449は南肩を確認したのみであるが、遺構検出面から約0.2mの深さで底部がほぼ平坦となる断面箱形を呈する。調査区の東、第174-4次調査において同じく東西方向の溝4条を確認しているが、その中で重複する溝3条のうち最も古いSD10449が形状や深さが類似し、延長も他の溝よりも対応する位置にある。出土遺物からSD10449は12世紀前半代と考えられており、今回出土した土師器小皿の年代とも齟齬をきたさない。SD10449はその東西方向が北に約4°振れるという方格街区の方向と同じくすることから、12世紀前半代における方格街区牛糞東区南北道路の北側溝と考えられる。

また、SD10449の南で確認したピットは直径0.3~0.4m程と小さく、底面標高は西側が10.258m、東側は10.128mと約10cmの差があるものの、両ピットの並ぶ方向はSD10449方向と類似する。両ピット間距離は、1.3mである。東側のピットでは底面に5cm程の厚みで粘土質埋土を確認している。

出土遺物は図化していないがSD10449から出土した土師器小皿片や、北区攪乱土層から出土した土師器細片などがある。



第24図 第201-7次調査 遺構平面図(1:200)・土層図(1:100)

8 第201-8次調査 (6A012)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字内山3039-2

原 因 凈化槽設置

調査期間 令和3年12月21日

調査面積 5.8m²

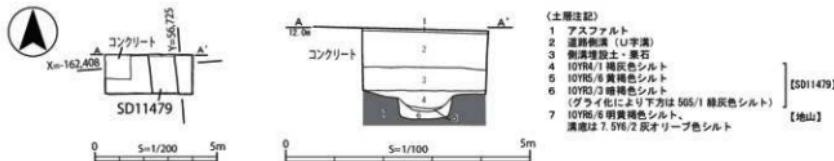
調査概要 近鉄斎宮駅前の既存施設を史跡來訪者のための便益施設として活用することを目的とした浄化槽設置に伴い、事前に実施した発掘調査である。調査地は史跡中央部の宅地で、方格街区の「内山東区画」北西部に当たる。東西3.6m・南北1.6m、約5.8m²の調査となった。

基本層序は、北接する町道に伴う排水溝及び下水溝埋設時

の碎石が現地表面から1.3mの深さまで及び、その下にSD11479埋土、遺構検出面である地山層となる。排水溝埋設に伴う擾乱が深く及び、遺物包含層は確認できていない。

SD11479は、幅1.1m・延長1.5m、残存する深さは約0.6mで、断面形状は両岸に犬走り状の平坦面を持ち、中央は箱型状を呈する。溝主軸はほぼ真北を志向する。また、土層観察から埋没後に掘り直した可能性がある（第4・5層）。下層埋土から須恵器壺体部片が出土したが、細片のため帰属時期は不明である。調査区が狭小ではあるが、溝の形状や軸方向等から、SD11479は方格街区区画道路の東側溝の可能性がある。

出土遺物は、SD11479から出土した須恵器壺体部片のほか、攢瓦土からの土師器・灰釉陶器・鉄製品の細片がある程度である。



第26図 第201-8次調査 遺構平面図 (1:200)・土層図 (1:100)

9 第201-9次調査 (6AR13)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字牛葉579

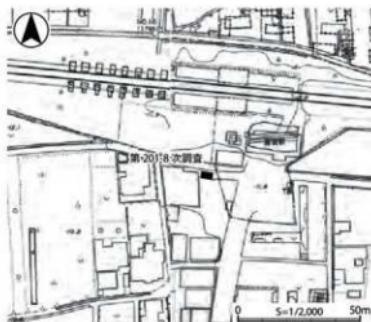
原 因 凈化槽設置

調査期間 令和4年1月13日

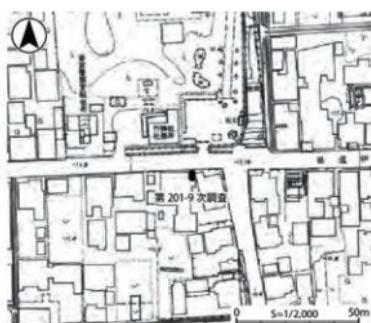
調査面積 5.4m²

調査概要 凈化槽設置に伴い、事前に実施した発掘調査である。調査地は史跡南東部の宅地で、方格街区の「鈴池東区画」に当たる。東西約1.5m・南北3.1mの矩形の調査区に、北部を東西約1m・南北0.5m拡張し、5.4m²の調査となった。

基本層序は、現地表面から約0.5mが円礫等を含む近世以降の造成土で、その直下、標高10.5mで遺物包含層上面に達し、標高10.4mで地山面となる。この地山面上で遺構検出を



第25図 第201-8次調査区位置図 (1:2,000)

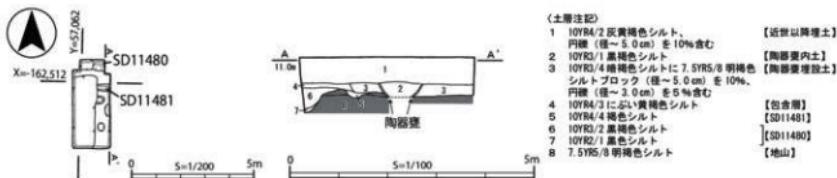


第27図 第201-9次調査区位置図 (1:2,000)

行ったが、調査区大半に近世以降の擾乱が及び、確認した遺構は東西方向の溝2条である。

SD11480は、北部拡張部において確認した溝で、溝の南肩のみを確認した。幅は0.35m以上・確認した延長は0.45mである。断面が船底状に落ちる形状で、溝最深部は調査区外にあるものと思われるが、調査区内での深さは検出面から0.5mである。SD11481は幅0.3m・延長0.5m、検出面からの深さは0.15mで、断面形状は船底状を呈する。西延長部分は近世の擾乱が及び確認できない。SD11480・11481とも出土遺物はないが、溝の形状や方向等から、特にSD11480は方格街区区画道路の東側溝の可能性がある。

出土遺物は、近世擾乱から出土した土師器皿・焰硝のみである。



第28図 第201-9次調査 遺構平面図(1:200)・土層図(1:100)

10 第201-10次調査(6AK6)

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字塚山3276番13、

3276番1

原 因 住宅建築

調査期間 令和4年1月27日～2月4日

調査面積 17.6m²

調査概要 個人住宅建築に伴い事前に実施した発掘調査で、調査地は史跡北西部の宅地である。申請地では、住宅建築に伴い昭和63年度第76-6次調査を、浄化槽埋設に伴い平成28年度第187-5次調査を実施している。今回の調査区は第76-6次調査区の北東に位置することから、既調査で確認した

遺構との連続性を把握するため、第76-6次調査区に約1.5m重複させて調査区を設定し、東西4.0m・南北4.4m、17.6m²の調査となった。

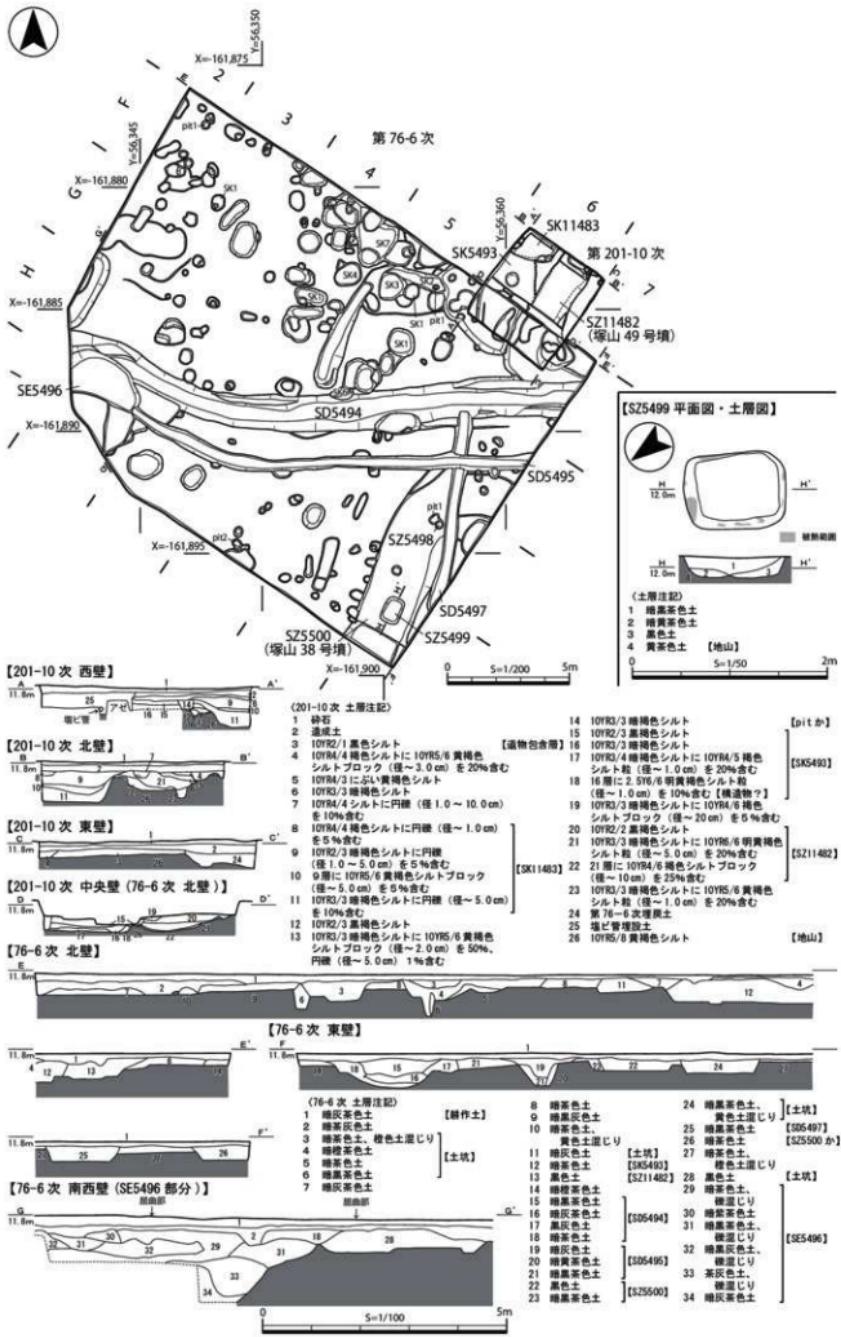
基本層序は、現地表面から砂石・造成土、現地表面から約0.15m下で遺物包含層、その下約0.15mで今回遺構検出面とした地山面に達する。遺構は、溝1条、土坑2基を確認した。

SK11482は、幅1.5m、第76-6次調査地を含めた延長5.3mで、地山面からの深さは約0.3m、断面形状は船底状を呈する。第76-6次調査地で東へ屈曲し、出土遺物は須恵器壺口縁部など少ないが、周辺の調査成果から方墳の周溝であろう。SK11483は調査区北西隅で確認した土坑である。全体形状は不明であるが、東西1.5m以上・南北1.2m以上、地山面からの深さ0.5mの断面箱形状を呈する。埋土は直径1～10cmの円錐を含む埋土と地山ブロックを含む埋土の互層となり、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は、13世紀代の所産と考えられる陶器壺や土師器鍋、青磁碗口縁部等がある。SK5493は、第76-6次調査地も含め、南北4m以上・東西約4m、遺構面からの深さ約0.4mの不整形土坑である。重複関係から、SK11482よりも新しくSK11483よりも古い。今回完掘していないが、第76-6次調査地では底面が硬化し、堅穴建物の可能性がある。出土遺物は土器細片のみである。

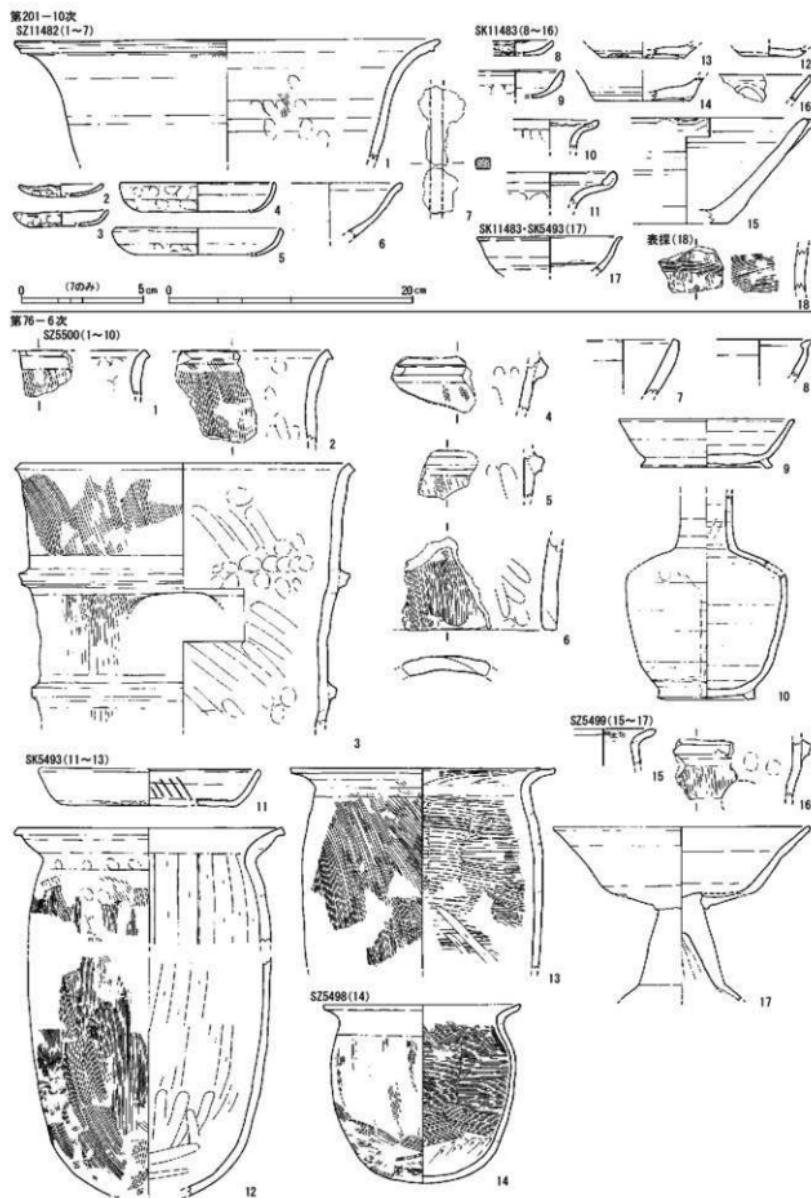
出土遺物は、SK11482出土遺物として須恵器壺口縁部片(1)、土師器小皿(2・3)・皿(4・5)、陶器碗(6)がある。後世の土師器小皿以下は調査区壁際でまとめて出土している。調査区北壁土層断面によると、SK11482上



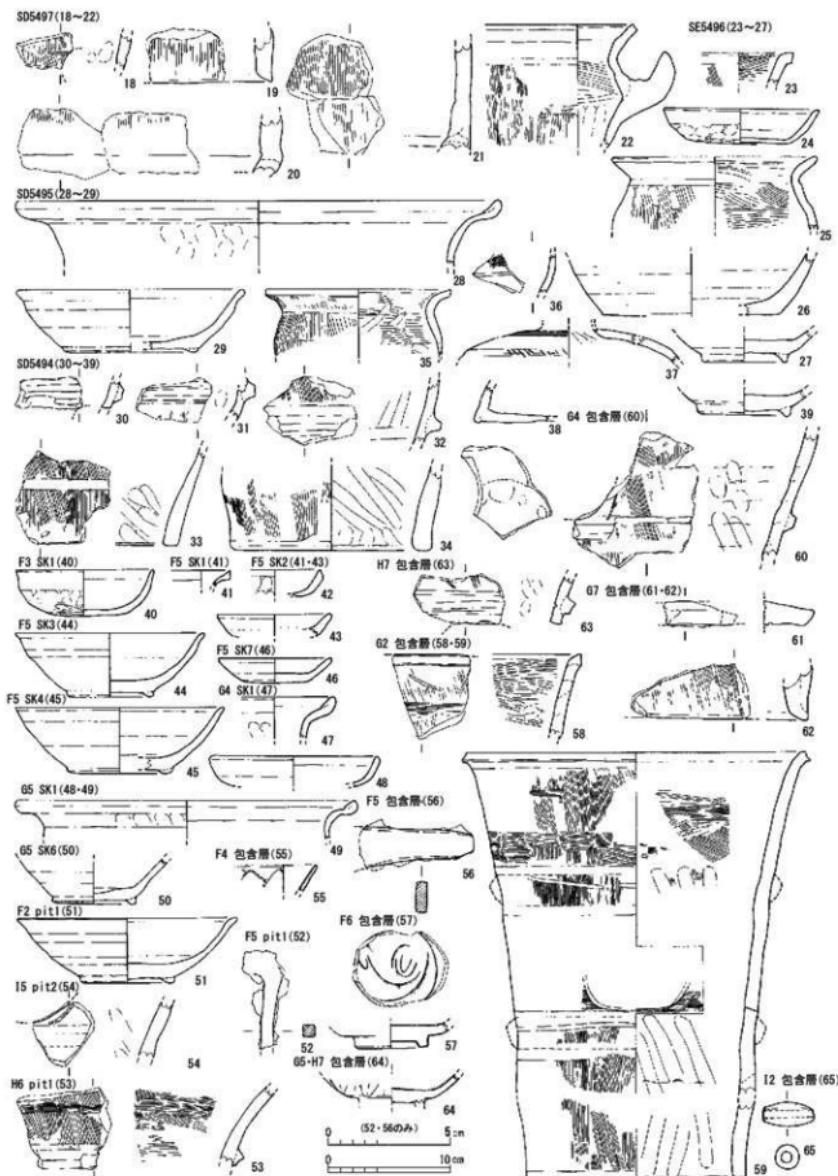
第29図 第201-10次調査区位置図(1:2,000)



第30図 第201—10次・第76—6次調査 遺構平面図(1:200)・土層図(1:100)・S25499平面図・土層図(1:50)



第31図 第201-10次・第76-6次調査 遺物実測図 (1:4、第201-10次の7のみ1:2)



第32図 第76-6次調査 遺物実測図 (1:4、52・56は1:2)

にSK11483と同様、埋土に円錐を含む第7層のピットがあり、今回の出土遺物も平面検出では確認できなかったピットに伴う遺物であろう。

今回の調査区では、SK5493は出土遺物が少なかったこともあり、昭和63年度（1988）に実施した第76-6次調査出土遺物が未報告であったためここで合わせて掲載した。第76-6次調査では、調査区の方向に合わせた4m×4mのグリッドを設定し、グリッド内でピット番号及びSK、SDそれぞれに対し1から番号を付与している。そのため、例えばSK 1が第76-6次調査で複数存在し、SD5494はF6区ではSD 1であるがG6区ではSD 3となるなど非常に煩雑となっている。第201-10次調査にまたがるSK5493からは土師器長胴甕（12・13）が出土することから、SK5493は斎宮I-2～3期、8世紀中～後半代の遺構と考えられる。

円筒埴輪や形象埴輪片が第76-6次調査区全体から出土するが、特に調査区西部で多く出土することから、調査区西壁にかかる土坑状の遺構が古墳である可能性があり、本調査区の西に古墳が広がるものと思われる。出土する円筒埴輪は、横長の楕円形のスカシを2段目に持ち、(59)・(60)や図化していない破片などから、楕円形スカシの向かって右下にスカシの内弧に沿うようなヘラ記号を施すという共通点が見られる。

第76-6次調査区のSZ5498出土の土師器甕（14）には、火葬人骨が認められていた。蓋状のものは確認されていない。

11 第201-11次調査（6AH12）

調査場所 多気郡明和町大字竹川字東裏356番地1

原 因 住宅建築

調査期間 令和4年2月21日

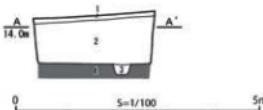
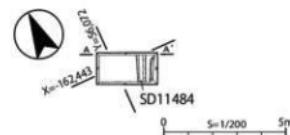
調査面積 3.25m²

調査概要 住宅建築に伴い浄化槽設置範囲について事前に実施した発掘調査で、調査地は史跡南西部の宅地である。設定した調査区は東西2.5m・南北1.3mの矩形である。現地は以前、住宅が建てられており、現地表面から地山面までは旧住宅に伴うと思われる造成土が確認され、遺物包含層は確認できなかった。現地表面から0.9m、標高13.25mで地山面を確認。この面上で遺構検出を行った。遺構は溝1条である。

SD11484は南北方向の溝で、幅0.35m・確認した延長1.1m、地山面からの深さは0.2mで、断面は箱型状を呈する。出土遺物は土師器細片があるのみで、時期は不明である。遺物はその他に、調査区東端の擾乱から出土した土師器片・陶器片がある。



第33図 第201-11次調査区位置図 (1:2,000)



〈土層注記〉
1 砂石
2 10YR5/2 反青褐色シルト
3 10YR4/1 梅灰色シルト
4 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト
【現代造成土】
【SD11484】
【地山】

第34図 第201-11次調査

遺構平面図 (1:200)・土層図 (1:100)

第2表 第201次調査 遺構一覧表

第291-1次調查

第3表 第201次調査 出土遺物一覧表（1）

第201-2次調查

300

- 4 -

第4表 第201次調查 出土遺物一覽表（2）

第201-6次調查

第291-10次調查

第5表 第201次調查 出土遺物一覽表（3）

第7行-首次調查

第6表 第76—6次調査 出土遺物一覧表

付編 史跡現状変更等許可申請

令和3年度に提出された史跡現状変更等許可申請は40件で、申請の内容は、一覧表（第7表）のとおりである。年度内に発掘調査を行ったのは、前年度以前の申請分も含め12件で、内訳は、史跡の実態解明のための計画発掘調査が1件、個人や公共事業の現状変更に伴うものが11件である。また、発掘調査を行わなかった30件は、小規模または工事が簡易で地下遺構に影響を及ぼさない場合や、すでに発掘調査を実施している箇所での申請である。なお、掘削工事等にあたっては斎宮歴史博物館調査研究課職員並びに明和町斎宮跡・文化観光課職員の工事立会のもとで実施している。これらの中には、申請者ならびに申請内容で分類すると下記のとおりである。

(A) 個人等による申請

22件の申請があった。うち住宅新築、浄化槽設置など発掘調査が必要とされた6件（第201-6～11次調査）について調査を行った。他の16件については、次年度に調査を実施したものや、住宅解体や工作物の設置等で土地利用区分の第三、四種保存地区にあたり、すでに発掘調査が行われている場合や、工事立会い等の条件付許可により、史跡に影響を及ぼすことなく施工している。

(B) 公共機関等による地域の生活環境整備に伴う申請

13件の申請があった。内容は、電気・通信関係や、排水路・道路の改修等であり、工事立会い後に着工している。

(C) 史跡環境整備および維持管理等に伴う申請

3件の申請があった。斎宮歴史博物館および明和町による史跡内環境整備および維持管理等に伴うものである。

(D) 発掘調査のための申請

2件の申請があった。これは三重県が主体となって斎宮歴史博物館が実施している計画発掘調査（第200次調査）で、計296.0m²が調査された。調査内容は斎宮歴史博物館から別途調査概報が刊行される。

順	大字	小字	地名	種	申請者	変更内訳	申請日	許可日	変更面積	登	備考
1	斎宮	牛尾	379	A	個人	住宅建築	R03.4.2	R03.2.1	2畳	4	
2	斎宮	牛尾	2405-2	B	(株)西日本電線電話 三重支店長	支線撤去	R03.4.14	R03.2.27	1畳	3	
3	斎宮	牛尾	96-3, 100-1, 100-2	A	個人	ブロック壁設置	R03.4.26	R03.2.17	62.3m ²	4	
4	斎宮	牛尾	2993	A	個人	住宅増築	R03.5.7	R03.5.18	206.81m ²	6	
5	斎宮	木屋山	67-3	B	株式会社カーネーション	新規開発	R03.5.7	R03.5.18	1畳	4	
6	竹川	南郷	247	B	株式会社カーネーション	新規開発	R03.5.18	R04.6.7	2畳	4	
7	竹川	中郷内	420, 426, 470, 476-1, 420-1, 420-2	D	三重県知事	電線撤去	R03.6.2	R03.7.16	296m ²	2 第200次調査	
8	斎宮	北野	3550-3	A	個人	カーボール設置	R03.6.24	R04.6.6	2畳	4	
9	竹川	古葉	3279番地3	A	個人	住宅増築	R03.6.31	R04.11	76.4m ²	4	
10	竹川	東美	356番地3	A	個人	住宅増築	R03.6.31	R04.15	154.3m ²	3	
11	斎宮	東美	2893	A	個人	住宅建築	R03.6.31	R07.18	78.0m ²	4	
12	斎宮	牛尾	2992, 2993	A	個人	住宅建築	R03.6.31	R07.18	100m ²	4 第201-6次調査	
13	斎宮	西沖	2835-1	A	株式会社田辺農園	住宅増築	R03.6.31	R03.18	38.7m ²	4	
14	斎宮	牛尾	2405-1, 2405番地3	A	多気郡斎宮町組合 代行理事会組合会	建物撤去	R03.6.31	R04.24	107m ²	4	
15	竹川	古葉	539-12	B	(株)西日本電線電話 三重支店長	園芸土壌除去	R03.6.23	R03.7.5	2畳	1	
16	竹川	古葉	515-5	B	(株)西日本電線電話 三重支店長	電柱修理付替	R03.6.23	R03.7.5	2畳	1	
17	竹川	古葉	5-6番と庄場地内	C	三重県知事	水道管修理	R03.7.1	R03.7.2	12m ²	1	
18	斎宮	牛尾	3021番地13, 3037番地14	A	個人	住宅増築	R03.7.12	R02.23	79.7m ²	4 第201-6次調査	
19	竹川	中郷内	474-1, 472-1	D	三重県知事	伝送ルーム設置	R03.7.30	R03.8.2	5基箱	2 第200次調査関連	
20	斎宮	地内	B	個人	側溝修理	R03.7.19	R03.8.5	L=500m	3		
21	斎宮	東美	2847番地2	A	個人	住宅増築	R03.7.28	R03.8.3	81.9m ²	4	
22	斎宮	東美	2847番地2	A	個人	住宅増築	R03.7.29	R03.9	22.4m ²	4	
23	竹川	北園	町内	B	明和町長・建設課	排水管設置	R03.8.2	R03.9	L=33m	3	
24	斎宮	西沖前	2407-1, 8	A	個人	外構工事	R03.7.28	R03.17	87.4m ²	4	
25	竹川	東美	356番地3	A	個人	住宅増築	R03.8.8	R03.10.15	179.3m ²	4 第201-11次調査	
26	斎宮	牛尾	3043番地3	B	近畿日本鉄道株式会社 伊勢本部北支社鉄道技術課	歩道埋設	R03.9	R03.10.15	4m ²	4	
27	斎宮	牛尾	3043番地203	B	近畿日本鉄道株式会社 伊勢本部北支社鉄道技術課	トイレ埋設	R03.9	R03.15	47m ²	4	
28	斎宮	牛尾	579	A	合資会社アドバンスカルチャー	浄化槽設置	R03.10.11	R03.11.18	8m ²	4 第201-5次調査	
29	斎宮	牛尾	3039-2	A	合資会社アドバンスカルチャー	浄化槽設置	R03.10.11	R03.11.18	9.3m ²	4 第201-6次調査	
30	斎宮	山田	3279番地13, 3276番地1	A	さきのいた株式会社	住宅増築	R03.10.13	R03.10.26	1棟ほか	4	
31	竹川	古葉	659-7	A	個人	カーボール設置	R03.10.21	R03.11.4	0.16m ²	4	
32	斎宮	牛尾	114番(114番)	A	個人	住宅増築	R03.10.25	R03.11.8	1棟ほか	4	
33	斎宮	細油山	2710-1, 3, 2710-2, 3, 2710-9, 11, 2710-12, 2760-7	C	明和町長・斎宮室・文部省水質課	ワッフルラーブ埋設	R03.12	R03.12.15	1畳	1	
34	斎宮	牛尾	2760-2	C	明和町長・斎宮室・文部省水質課	井戸新設	R03.12.6	R04.1.21	2畳	4	
35	斎宮	牛尾	514-1	B	(株)西日本電線電話 三重支店長	電柱新設	R03.12.6	R03.12.15	1畳	4	
36	斎宮	山田	3230番地13, 3236番地1	A	さきのいた株式会社	住宅増築	R03.12.7	R04.21	9.3m ²	3 第201-10次調査	
37	斎宮	牛尾	3230番地13	B	近畿日本鉄道株式会社 伊勢本部北支社鉄道技術課	支線埋設	R03.12.7	R03.12.21	2畳	3	
38	竹川	古葉	582	A	有限会社ソーム・タウン	護岸工事	R03.12.24	R04.10	550m	3 第202-1次調査	
39	斎宮	牛尾	114番(114番)	A	個人	住宅増築	R04.1.6	R04.2.18	82.39m ²	4 第202-2次調査	
40	金剛郡	森山	高通内	B	三重県知事	道幅修繕	R04.2.16	R04.3.4	L=10m	3	

第7表 令和3年度現状変更等許可申請一覧



写真図版 1 第201-1次 3トレンチ全景（北から）



写真図版 2 第201-1次 4トレンチ北土層断面（北から）



写真図版 4 第201-1次 15トレンチ全景（西から）



写真図版 3 第201-1次 7トレンチ全景（西から）



写真図版 5 第201-2次 東トレンチ検出状況（南から）



写真図版6 第201-3次 A区全景（北から）



写真図版7 第201-3次 B区全景（南から）



写真図版8 第201-4次 1トレンチ全景（西から）



写真図版9 第201-4次 2トレンチ全景（北西から）



写真図版10 第201-5次 調査区全景（南東から）



写真図版11 第201-6次 調査区全景（北から）



写真図版12 第201-7次 北区全景（西から）



写真図版13 第201-7次 南区全景（北から）



写真図版16 第201-10次 調査区全景（北西から）



写真図版14 第201-8次 調査区全景（南西から）



写真図版17 第201-11次 調査区全景（北西から）



写真図版15 第201-9次 調査区全景（北から）

報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと れいわさんねんどうげんじょうへんこうきんきゅうはつくつちようさほうこく						
書名	史跡斎宮跡 令和3年度現状変更緊急発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	39						
編著者名	山中由紀子 味噌井拓志						
編集機関	斎宮歴史博物館（調査研究課） 明和町（斎宮跡・文化観光課）						
所在地	〒515-0332 三重県多気郡明和町大字馬之上945番地 TEL 0596 (52) 7126						
発行年月日	西暦 2023年3月19日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東經 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210 34° 31' 55" ~ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ~ 136° 37' 37"	20210401 ~ 20220331	全11件 740.7m ²	史跡現状変更に 伴う緊急発掘調査 (史跡斎宮跡 第201次調査)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
斎宮跡第201次	官衙	弥生・古墳・ 奈良・平安・ 鎌倉・室町・ 江戸	古墳・堅穴建物・ 掘立柱建物・掘立 柱壙・土坑・井戸 ・溝・柱穴・ピッ ト	弥生土器・土師器・須 恵器・埴輪・綠釉陶器 ・青磁・灰釉陶器・黑 色土器・ロクロ土師 器・無釉陶器・近世 陶磁器・瓦・製塙土 器・土製品・石製品 ・鉄製品	関連調査とし て昭和63年度 第76-6次調査 成果を所収		
要約	<p>本調査は、史跡内の現状変更に伴う緊急発掘調査である。大半の調査は住宅新築に伴う小規模なものであるが、史跡北部の第201-1次ではいわゆる「鎌倉大溝」を、方格街区の内山西区画にあたる第201-6次では奈良時代の堅穴建物2棟と後出する掘立柱建物等を、史跡西部の第201-10次調査では古墳時代の方墳1基を確認するなど重要な調査成果を得た。</p> <p>また、「歴史まち整備事業」関連の第201-1次調査は幅3m程のトレンチ調査ではあるが、方格街区西加座北区画を縦横断する調査となり、同区画の様相を確認できた。これらは史跡内の新たなデータとして蓄積し、今後の史跡内発掘調査報告書にも反映する。</p>						

史跡斎宮跡

令和3年度

現状変更緊急発掘調査報告

令和5(2023)年3月19日

編集 斎宮歴史博物館
発行 明和町
印刷 光出版印刷株式会社